

389
49



始



11-219

389-49

放浪の佳人

小田律演述

[西洋講談第四編]

大正
10 7. 25
内交

東京新光社出版

口 演

一席御耳を煩はします。兎角近頃は御料理などに致しまして、日本料理は飽きてしまった、と言つて洋食ばかりではバタ臭さくて御口に合はないと申すところから和洋折衷の御料理が宴會にも御家庭にも歡迎されるといふ世の中、小説講談本などに致しまして、日本物は飽々した、西洋物は面白い、何かもつと變つた讀物はないかといふ話をチヨイ／＼耳に致しますがそこへ生れましたのがこの西洋講談、材料は西洋で、板前は日本といふ新しい御料理、まして、探偵、戀愛、冒險、人情などと申す誰方にも御口に合ふ材

料を一つにこね上げましたもの、召し上つて御氣に召すことは請合、舌鼓を打ちましたならば精々御吹聴を御願致しますと、發行者が高座へ罷り出ましての御喋りです。

大正十年二月

發行者 敬白

西洋講談 放浪の佳人 目次

- 一、女文字の手紙……………(一)
- 二、不思議な終……………(一〇)
- 三、成金の一人息子……………(一七)
- 四、妖婦アミリヤ……………(四二)
- 五、フロラ嬢の下心……………(六〇)
- 六、思はぬ嫌疑……………(七四)
- 七、青天の霹靂……………(八八)

八、奸 計……………(一〇五)

九、妖婦の成功……………(一一八)

一〇、不思議な肖像畫……………(一二七)

一一、凶 報……………(一三〇)

一二、新しい世界……………(一三六)

一三、大事 な 體……………(一四〇)

一四、アミリヤの弱點……………(一八九)

一五、奇 遇……………(一九六)

一六、崖底の死體……………(二二八)

一七、惡魔の誘惑……………(二三三)

一八、涙 と 涙……………(二四四)

一九、難 船……………(二五四)

二〇、重大な事件……………(二六六)

二一、男爵の秘密……………(二八四)

二二、姿 見 の 前……………(三〇〇)

二三、男爵夫人の名刺……………(三一一)

二四、假裝舞踏會……………(三二二)

二五、「夢」の女神……………(三三〇)

二六、不思議な聲……………(三四五)

二七、亡父の戀人……………(三五七)

二八、男爵の悪事露顯……………(三五六)

二九、大事業家の蹉跌……………(三六二)

三〇、幸運 不運……………(三九二)

目 次 終

放浪の佳人

小 田 律 講 演

一、女文字の手紙

本篇は標題を「放浪の佳人」と致しまして、英國第一流の通俗小説家チャールズ・ガーヴキスが會心の作を演述致します。

時は三月の或る夕方、所は倫敦から二百哩ほど離れた山間の小天地であります。小歌みなく降りしきる雨を衝いて、山の麓に現れた一人の男。その風采は何う見ても此邊の百姓ではない。上衣の襟を立て、烏打帽を目深に冠つて孤鼠々々と歩いて来る。少時致しますと、其男は腰を屈めて頻りと地面を捜し、時々何か拾つ

てはポケットに押し込めて居りましたが、急にビクツとして耳を聳てたかと思ふと、慌てて岩蔭へ身を潜めました。といふのは、その時、小馬に跨つた小さな姿が峻しい山坂を勢よく降りて来た。其處には連日の雨に水嵩の増した谷川が物凄く流れて居る。その縁まで来ると、件の騎手は手綱を引締めて、ちよつと思案顔に流れを見詰めて、それからニツコリ笑つてさんぶと馬を騎り入れた。鞍上の人に確信があれば、馬にも同様の確信があると見えまして、颯々と淺瀬を涉り、深い處をぐんぐん泳いで、間もなく向ふの岸に上りました。騎手は満足の笑みを浮べて、二三度愛馬の頸を叩き、それから河原の磊石の間を走らせて、とある小山の裾を曲ると、一ツの建物が見えて来る。

誠に見る影もない古い屋敷、眞赤に錆びた鐵の門は、何年も開け放してあるらしく、扉の下には草が生え、門から立關へ續く馬車道は雑草と苔とで殆ど消えかけてゐる。家の外壁は一面に蔦で蔽はれ、ペンキのはけに女關の扉は門と同じくこれ亦開けつ放し。窓は處々硝子が脱れて、その代りに板が打ちつけてあるし、煙突の笠石は頽れ落ちて屋根の上に轉がつてゐる。家の中に燈火が點いてゐなければ、誰しも人の住家とは思はないであらませう。

扱て、件の騎手は、小馬が此建物の見えるところ迄やつて参りますと、巧みに姿勢を横騎りに變へました。騎手は十八九の美しい娘でありました。尤も、唯だ美しいとばかりでは、充分でない。彼女の顔立と姿は、美少女といふよりも、寧ろ美少年と謂ひ度いくらゐるです。

馬を厩に繋いで、鄭寧に體を拭いてやり、それから娘は、裏口の扉を開けて家の中に這入りました。

娘『マルサや、お父さまはお歸りになつて?』

マ『はい、お歸り遊ばしました。お書齋にゐらつしやいます。まアお嬢さま、どうなすつたんで御座います? 貴女は! ビシヨ濡れちやア御座いませんか。早

くお召物をお換え遊ばせ。」

かう言つたのは四十五六の女。此家の唯一人の女中です。

娘「今換えてよ。川の水が大變殖えてたから、泳がなけりや渡れなかつたのよ。」

さうく、着物を換えるのは後にして、お父さまのところへ一寸行つて来よう。」

女中のマルサが何か言ふのを耳にも入れずに、娘は内廊下を驅けて行つて、書

齋の扉を開け、さし足抜き足、父の傍へ歩み寄つて、出し抜けに頸へかぢりつき

ました。ストーヴの傍でウトウトしてゐたお父さんのレギノルト・ライオールは、

吃驚して眼を覺した。

父「何處へ行つてたんだ、ノラ。」

娘「牛を連れて町へ行つて来ましたの、お父さま。」

父「さうか。賣りに行つたんぢやアあるまいな。」

娘「賣つて来ました。」

父「安く賣り飛ばしたのか。」

娘「ええ、思つたより安く御座いました。牛は今安いですもの。」

父「そんなら何故ネツドにさう言つて連れて戻らせないんだ。」

娘「そんな事をおツしやつたつて、お父さま、お金が要るんですもの。利子を拂

はなけりやアなりませんのよ。此の間から延びくになつてゐるでせう？でも、お

父さまは御心配なさるには及びません。牛を賣つたお金で拂へますから。お父さ

ま、この六月まではお氣をお付け遊ばさないと可けませんわね。ミツチエルの方

の證文の期限が——」

父「氣を付けろだ！ 證文！ 俺は其様な言葉はもう聞き度くない。其様な話は

よしてくれ！ かう借金取りに攻められ通して、少しも樂が出来ないくらゐなら

死んだ方がマシだ。」お父さんの方が駄々をこねてる。

娘「でも、お父様はツイ此間倫敦へ遊びにゐらしたぢやありませんか。」

ノラが軽く笑うと、お父さんのライオールは顔を赧くして眼を伏せました。此處で一寸説明して置きますが、この父娘ほど性格の反対なのは珍しい。娘さんは蘇格蘭生れの母の血筋を引いて、至つて元氣の好い、氣丈者であるが、お父さんの方は我儘で、意志が弱くつて、氣位ばかり高くつて、少しも取柄のない人物。ライオール家が英國で有名な家柄であるといふ事實を鼻にかけて、いくら貧乏をしてもお殿様氣質が抜けません。で、母親が世を去つてからは、娘のノラが、耕作をやつたり、牧畜をやつたりして、氣むづかしい父親の世話をしてゐるのです。かういふ次第でありますから、お父さんのライオールは、娘さんに一本突込まれて顔を赧くしました。

父「俺は近い中に、もう一度倫敦へ行つて來なけりやアなるまいと思ふんだ。」

娘「あら、御用がおありなんですか？」

父「うむ。是非とも片付けなければならぬ用事があるんだ。」

お父さんに其様な用事がある筈がないとは萬々承知して居りますが、惻巧な娘です。それから、それを口へ出しては言ひません。黙つて筆筒のところへ行つて、抽出から靴を取出し、その中味を机の上へあけました。その時金貨が一つ床へ轉け落ちたので、それを搜してゐると、一枚の封筒の落ちてゐるのが目に付いた。何氣なしに拾ひ上げますと、香水の匂がふんくする。香水をつけた封筒なんかはノラの家では、それこそ珍品です。好奇心に驅られて、その上書を見ると、確かに女の手だ。

娘「お父さま、これ誰から來ましたの？」

言はれて、ライオールは、いきなり状態を娘の手から引つたくつて、ストローヴの中へくべて了つた。

ラ「回狀か何かだ。何處かの洋服屋から寄越したんだよ。間違つて寄越したんだらう。」

「お父さまがフロックでも新調なさるかと思つて寄越したんでせう。ほんたうに一つ新調なさらなければなりませんわね。」

「うむ。俺の服も可なり甚くなつたからな。此間註文して置いたよ。倫敦へ行つたら取つて来よう。しかし、代金は何時拂へることやら。ノラ、お前の身装も可なり甚いぞ。成上り連中が美々しい服装をして飛び廻るのに、ライオール家の吾々が案山子のやうな風采か、誠に結構なことだ！ さういへば今夜は隣りで晩餐會があるさうだ。マルサの話では、何でも二十人以上も客が来てゐるといふぢやないか。先刻馬車が何臺も通つたのは、それだつたんだ。フェランドの成上りめ、此邊の大地主か何ぞのやうに威張りくさる。ライオール一家は——」

「フェランド家の人が何をしたつて構はないぢやありませんか。あの人達がお金持だつて、私達が氣にかける必要はありませんわ。それに彼人達は善い人達かも知れません。フェランドの奥さんは一寸見ても——」

「後生だ。彼奴等の話はよしてくれ。」

「え、よませせう。あたしフェランドさんの事なんか考へてやしませんわ。それよりか、着物を換えて、お夕飯を食べて来ませう。お父さま。お煙草は此處に御座いますよ。」

娘が室を出て行くのを見済まして、ライオールは妙な笑ひ方をして、ポケットを捜り、香水の匂のぶんくする手紙を取り出しました。何をするかと思ふと、頻りと其匂を嗅いで、懐かしさうに接吻をした。困つた男です。それから此の不良老年は手紙の文句を読んで獨りで悦に入つて居りましたが、少時すると欠伸を一つして、椅子に反り返つた。

此手紙が誰から来たか。可憐なる少女ノラの一身上に如何なる關係を及ぼすか回を重ねるに従つて、事件は段々と錯雜して参りますから、どうか末をお楽しみに御愛讀をお願い致します。

二、不思議な縁

扱て、娘さんのノラは着物を着換え、晩の食事を済ませて、それから女中のマルサと家政上の相談を始めましたが、マルサは隣りの晩餐會の事が氣になつて、なか／＼ノラの相談に乗らない。

マ「お嬢さま、お隣りの旦那様は減相もないお金持ださうで御座いますよ。それに近頃鑛山が當つてお金が大變儲かつたんで御座いますッて。屹度、金山かなんかで御座いませう。」

ノ「御運の好い方ね。それはさうと、マルサや、お前あれ丈の鶏を一人で世話して行けるかえ。」

マ「ええ、出来ますとも、お嬢さま。餌がもつと一杯ありますれば、譯はありません。鶏は脂肪が乗つて來ると、よく餌を食べるんで御座いますよ。……ねえ、お

嬢さま、お隣りの別荘は晝間のやうに明るう御座いますよ。ネツドの話では、何でもコツクさんが四人から來てるんで御座いますッて。その中の二人は男ださうで御座いますよ。お嬢さま。私には、逆も男なんかと一緒に働けません。お臺所の仕事は、アダム、イズの昔から女に極つてゐますわねえ。」

ノ「マルサや、少時お隣の晩餐會を忘れて、あたしの相談に乗つておくれよ。あたし、此間買ったミノルカに卵をかへさせようと思ふのよ。それには鶏舎も遊び場も新しく拵えなけりやならないんだが、又たお金が要るわね。どうしたら可いだらう。」

マ「まあ、お嬢さまは、よくお氣が付きますこと！ ですけども、お嬢さま、貴女は其様な事をお氣になさるもんぢやありません。貴女はライオール家の一粒種のお嬢さまぢやア御座いせんか。奥に引込んでらして、それから馬車に乗つて——」

「奥に引込んで馬車に乗るの？ ほ、ほ、ほ。だけどねえ、マルサやあたしには馬車はないわ。それから、あたしが奥に引込んでお嬢様のやうにしてるなら、家は何うなるか分りやアしないわ。それはさうと、ネットは何處へ行つたらう？ あたし行つて捜して来よう。」

ノラは古い外套を引掛け、頭巾を冠つて、作男を捜しに出掛けた。いつの間にか空はすっかり霽れて、好い月が出て居りました。ノラは方々捜し廻つて、たうとう納屋の中にネットを見付けましたが、自分と幾つも年齢の違はない少年が、疲れ切つてグツスリ寝込んでるのを見ると、可哀相で揺り起す氣にはなれませんでした。その儘納屋を出て、牛小舎を見廻りに行きました。

「おや、又た斑がないよ。ほんたうに仕様がないわね。」

「斑」といふのは若い牝牛の名です。此牝牛は餘程不良性を帯びてゐると見えまして、夜になると、何處かへ遊びに出掛ける。ノラはネットの太いステツキを手

に取つて、今度は「斑」を捜しに出掛けました。

「斑や！斑や！」と呼ばはりながら、フェランド邸とライオール邸の境界の方へ歩いて参りますと、生牆に大きな穴の開いてゐるのが、月明りに瞭然と見える。

「ああ、此穴からお隣りへ這入つて行つたんだわ。ほんとに困つちまうわ。」獨語を言ひながら少時イんで居りましたが、思ひ切つて穴を潜り抜け、フェランド邸の地所へ踏込みますと、ピアノの音と女の歌う聲が聞えて来た。ノラは音楽が非常に好きですから、少時は牝牛の「斑」の事も忘れて、ピアノの音に聴きとれ、知らず識らず、其方へ近づいて参りますと、窓下の露臺に誰か腰かけてゐるのを見付けて、びっくりして立止つた。

それは一人の青年でありました。頬杖をついてじいっと地面を凝視ながら何か頼りと考へ込んでゐる様子。一體誰だらう。最初はお客の一人かと思つたが、粗末な乗馬服を着てゐるところを見ると、フェランド邸の馬丁かも知れない。しか

し雇人ならば、今時分あんな處に腰かけてゐる筈がない。それに此青年には何處かに品があつて、一寸見ても馬丁や何かではないことが分つた。「早く何處かへ行つて了へば可い」ノラは心の中で斯う呟きながら身を引いて木の茂みへ隠れた。ところが青年は中々動かない。そのうちに客間のフランス窓が開いて、數人の男女が笑ひ興じながら出て來た。婦人連は何れも素ばらしい身装をして、露臺を歩いたり欄干に凭りかかたりするたんびに、身につけてゐるダイヤがきら／＼と光る。けれども、普通の女とは違つて、ノラは斯ういふ人々を見ても少しも羨ましくは思ひません。いや、身装を飾る女に對して、どツちかといふと、輕蔑の念を抱いて居りました。

「ああ、私が男なら、あんな人達がるたつて、平氣で進んで行けるんだけど！」と、ノラはつく／＼思つた。流石に女であつて見れば、妙な身装を笑はれやしまいか、といふ懸念もある。此時、ノラは露臺の直ぐ前に居りましたから、其等の

婦人の顔を一夕はツきりと見別けることが出來ましたが、その中の一人の若い女が巻煙草をくわえながら、欄干に凭つて、一人の紳士と話をしてゐるのを見て、驚きました。その女は非常に綺麗な女でありました。で、ノラは他の女に見られるのは仕方がないとしても、此女にだけは、どうしても見られたくないと思つたのでありました。

しかし、その中に、此女が「向うへ行つてお茶を飲みませうよ」と言ひ出したので、一同は家の中へ入つて了つた。件の青年も何處かへ姿を消した。ノラは好い案排だと思つて、木の茂みを出て、再び牝牛の搜索を始めました。芝生の周圍に路がついてゐるので、それを辿つて行きますと、遙かの彼方に「斑」が悠々と草を食べてゐるのが見えた。ノラは拔足差し足其方へ歩み寄る。その時何處からか先刻の青年が出て來て、彼女の行手を遮つた。

「青、おい、誰だ、此處で何をしてゐるんです。」

「私は牛を捜しに参りました。いつのまにか小舎を抜け出して、あの塙根を潜つて、此方の地面へ這入つたんです。おや、たつた今、向うに立つて居たのに、もう何處かへ行つて了つた」

青「貴女はライオールさんから来たんですね」

ノ「ええ、さうです」

青「僕が手傳つて捜して上げよう」

ノ「ありがたう。あの牛は時々小舎から抜け出して私達に手数をかけるんですの」

ノラは青年と肩を並べて歩き出しましたが、女性特有の直覺力で、青年が自分の方を時々窺み見ることを知りました。少時すると、青年がノラに向ひまして、

青「誰か男の人が捜しに來られなかつたですか？」

ノ「ええ、みんな用をしてゐましたから。それに私は誰にも言はずに出て参りました」

青「貴女のやうな婦人には、少し骨が折れますよ。おまけに夜ですからね。」

ノ「私一向平氣ですわ。かういふ事には慣れてゐますから、どうかお構ひなく向うへ被入して、音楽でもお聴きなさいまし」

青年は氣まり悪さうに顔を赧くした。

青「僕が露臺に腰かけてるのを見たんですね。ええ、僕は歌を聴いてました。僕は音楽が大好きです。あの婦人は中々上手に歌ひましたねえ。しかし、あんな處にゐるのは僕が悪かつたんです。誰かに見付かつたかも知れない」

青年は顔も綺麗でありましたが、その聲が又た何とも言へない好い聲でした。

ノラは青年の當惑の様子を見て、同情の念を起した。

ノ「見付かつては構はないぢやありませんか。私が男なら、平氣で彼處へ腰をかけて、歌を聴いてますわ。誰が何と言ひませう。貴方は別に邪魔をした譯ではないでせう。誰かが何か言つたら、私なら正直に言つてやりますわ」

青「貴女なら、さうでせう」

青年は笑つた。さうして感心したやうにノラを見下した。

ノ「私、貴方はフェランドさんの御家族かと思ひましたわ」

青「さうですか。家族といへば家族です。僕はフェランド男爵の——さうですね——従兄弟にでもなりますかな」

ノラは意外に思つた。丁度此時二人は牝牛に追ひついたが、ノラがテレ隠しに吐つたので「斑」は又た先へのそく歩いて行つた。二人の間には一寸氣まづい沈黙があつて、それからノラが訊ねました。

ノ「そんなら、貴方は何故あんな處に腰かけてゐらしたんです。なぜ、皆さんと御一緒にゐらつしやらないんです」

青「その譯ですか、それには事情があるんです。僕はフェランド男爵の親戚ですが、家族の一人ではありません。僕の親父は——しかし、此様な話を貴女にお聞

かせするの何ですな——」

ノ「ええ、御迷惑なら、伺はなくつても宜しう御座いますわ。こんな事をお訊ねしたのは、私が悪う御座いました。私、別段伺はうと思つた譯でも御座いませんの。」

青「ちつとも迷惑ぢやありません。僕があんな處に腰かけてるのを見て、貴女が不思議に思ふのが當り前です。僕の親父は——事業に失敗しましてね。それから死んで了ひました。金は一文もなし、僕は途方に暮れました。そこでフェランド男爵に引取られて、此邸で働くことになつたんです。男爵が馬の養殖をやつてますので、僕が其方を引受けてゐます。まあ、男爵の使用人と言つたやうな譯です」

ノ「でも、變ですわねえ……」

青「どうして？何が？」

ノ「男爵が御親戚の貴方をまるで何かのやうに……」

青「雇人のやうに待遇するのがおかしいと言ふんですか。さうです、男爵も氣が咎めるでせう。しかし親戚といふ事は誰も知りませんよ。貴女以外には——僕は、何うして此様な事を貴女に話す氣になつたんでせうか」

ノ「私誰にも喋りませんから……でも男爵は餘りですわね」

青「なあに何うだつて構ひません。最初の中は僕も氣にしましたがね……それに彼様な連中の仲間になれるよりか、馬と一緒になつてる方が餘ッ程愉快ですよ。

僕は、あんな窮屈な着物を着て、婦人連の御機嫌を取つたりなんかするのは、大嫌ひです」

ノ「私も大嫌ひですわ」

青「しかし貴女は女ぢやありませんか」

ノ「え、でも私、男に生れるなら、あんな人達よりか貴所の御身分になりたう御座いますわ。貴方は立派に仕事をしてらッしやるでせう。あの人達は、煙

草を吸ふ事と、婦人の御機嫌を取るより外に、何も出来ないものですわ」

二人は話に夢中になつて牝牛の事を忘れて居りましたが、氣が付いて見ると、牛は何時の間にか來た路を引返して、芝生の眞中へ飛び出してゐる。二人は一生懸命に追掛けた。困つた事には、又た露臺に五六人の男女が出て來た。しかし引返す譯にも行かないので、ノラは頭巾を眞深に引被つて驅けて行きました。

すると、先刻の生意氣な若い女が大きな聲で叫んでゐるのが聞えた。

女「ちよいと、あれを御覽なさい！あんな處に牛がゐりますよ。あれをあの二人が追掛けてるんですよ。面白いわね！ちよつと好い男ね！あら、もう一人は女の子ぢやないの!?ああ分つたわ。ロマンスよ。貴方は分らない？馬鹿ねえ。あの二人は戀人同士よ。あんな夢中になつて、あの牛に氣を付けるのを忘れたんだわ！」

若い女は傍の紳士を顧みて笑つた。ノラも青年も、此言葉を聞いて顔を赧めました。少時してから青年が走つて行く牛の前に手を擴げて立塞がると又た件の

若い女の聲が聞える——。

女「ほんとうに好男子ね。男爵、あれは誰ですか？」

ポケットに手を突込んで、シガーをくわえながら、露臺へ出て来たのは、丈のすんぐりした、顔の脂ぎつた老紳士。これがフエランド男爵であることは、若い女が今男爵と呼びかけたので分ります。

男爵「あれですか、私の家に使つてゐる男ですよ」

女「ちよつと呼んで頂戴。あの人と話をして見たいんですから。」

男爵「フロラさんのお望みだから、呼んで見ますかな。彼は極く内氣でしてな。来るか何うか分りませんよ。美人のお招きに頂ければ、男は喜んで飛んで来るものですが……おい！イリオット！」

青年は自分の名を呼ばれても、振りむきもしない。

女「馬鹿な男ね！それちやアあの娘を呼んで頂戴」

男爵「困りましたなあア私はあの娘の名を知らんのです。此邸の者ではありませんが、顔に見覚えがありません」

若い婦人は、もどかしがつて、

「おい、此處へお出で！お前に話があるんだから！」

けれども、ノラは聞えないふりをして、青年と二人で牛を生墻の方へ追ひ戻した。ところが、墻根の壊れた所が二本の太い丸太で塞いである。ノラには何うしても其丸太を持上げることが出来ない。すると、青年が前へ進み出て、雑作もなく丸太を取り除けた。

イ「貴方は力があるわねえ！私何うしても持上げられませんでした」

ノ「だつて貴女は女です。女には重い物は持上げられません」

イ「あら、そんな事はありません。私だつて重い物を持上げられますわ。そりやア男の人には叶ひませんが……貴方がらッしやらなければ、何とかして丸太

を取除けましたわ』

イ「そんな事に腕力を出すものではありません。氣を付けないと、今に怪我をしますよ』

ノ「大丈夫です。怪我なんかしません』

イ「さうぢやない。貴女が僕の妹なら、僕は貴女に其様な事はさせません』

ノラは笑つて、青年の顔を見詰めました。

ノ「貴方が私の兄さんでも、貴方の言ふなりにはなりませんわ』
今度はエリオットは笑つた。

エ「貴方はなかく意地ッ張りだ。此牛よりも貴女の方が手に負えませんね』
ノ「ええ、さう』

ノラは少時黙つて居て、それから何氣なく、「先刻私を呼んだ女の方は誰です。御存知ですか?』

イ「あの婦人ですか。あれはフロラ、バートレーと言つて、バートレー男爵の娘です。此家に逗留してゐるのです。あの人もなかく意地ッ張りのやうですよ。若い女の人は大抵意地ッ張りで見えますね』

ノ「意地でも張らなければ、女は男に甚い目に逢はされますわ』

イ「なるほど、さうですね』

青年は大に感心した様子。

ノ「先刻貴方の事をイリオットと呼びましたわね。貴方のお名前ですか』

イ「さうです。僕はイリオット、グレアムといふ者です』

ノ「あら、それでは貴方は蘇格蘭の方ね。私も、母が蘇格蘭の生れですから、蘇格蘭の方はお懐しう御座います』

イ「さうですか。道理で貴女は勇氣がある。夜一人で牛を捜しに出るなんて、勇氣がなければ出来ません』

ノ「そんな事何でもありませんわ。もう、家へ来たも同じですから、歸つて下さい」

イ「僕が牛を追ひ込んで上げませう」

ノ「もう澤山です。彼處にネツドが来ましたから」

作男のネツドが向うからやつて来たので、イリオットは立止つた。

イ「僕の名を聞かせましたから、今度は、貴女の——貴女の名前を聞かせてくれないませんか」

ノ「私はノラ、ライオールと申します」

イ「あッ！さうですか。大變失禮しました。僕は、實は……さうとは知りませんでしたから……どうも失敬しました」

ノ「何もそんなにおツしやるには當りませんわ。いろく御厄介をかけて、私こそお禮を申します。それでは御機嫌好う！いづれ又た私が貴方に御返禮をする折

も御座いませう」

ノラが微笑を含んで握手を求めると、青年は顔を赧らめて、大きな手でノラの可愛らしい手を握りしめました。

イ「左様なら！僕は貴女の御返禮を喜んで受けます」

イリオットは戯談半分から答へたのでありますが、他日ノラが青年に立派な返禮をする機会が来ようとは、神ならぬ身の、二人とも知る由もなかつた。

三、成金の一人息子

イリオットと別れて吾家へ歸りましたるノラは、早速居間へ這入りまして、少時は鏡に映る自分の姿に見入つて居りました。いつもは一向に身装を氣にしない性質であります、今夜はそれが氣になるらしい。イリオット青年が自分を百姓娘か何ぞのやうに思ひ違へたといふことが、どう考へても面白くない。何となく自

分の誇りを傷けられたやうな氣が致します。フェランド邸の女客も、ノラを百姓娘と思つたやうであります。不思議な事には、其方は一向氣にならない。「あんな女に何と思はれたつて構ひやしない。だけど、あの方、あの様子の好い方に逢うんだつたら、こんな身装で行くんぢやなかつたツけ。だけど、仕方がないわ。どうせ私はお百姓仕事をするんだから、それには、それ相當の身装をしなけりやならない」

諦めの好いノラは此様な事を考へてゐるうちに疲れて眠つて了ひました。翌朝になりますとお父さんのライオールが急に倫敦へ行くと言ひ出したので、ノラは甲斐々々しく旅仕度を手傳ひ、お父さんをステーションまで送つて、それから一旦吾家へ引返しましたが、いつもと違つて何となくソワソワしてゐる。その中に部屋へ引込んで何かコト／＼やつてゐたかと思ふと、珍しく綺麗にお仕粧をしておまけに上等の晴着を着飾つて出て來ましたから、女中のマルサが不審に思つた。

マ「おや、お嬢さま、貴女は何處へお出掛けなさります。たつた今しがた停車場からお戻りになつたばかりで、これから又たお出掛けで御座いますか。それとも何方かお客さまがお見えになりますかね」

ノラは恥かしさうに笑ひまして、「牧師さんの所へ行かうかしら——それとも、よさうかしら——マルサや何處へ行かうかねえ」

マ「何處へ行かうかねえツて、お嬢さま、私に御相談なさつても、何とお返事をして宜しいか分りません。一層の事もさうやつてお座敷の真中に座つてゐらつしやいませよ。ほんたうにお立派で御座いますこと！お嬢さまは、いつもさういふお召物を召してゐらつしやらなければ可けません。世の中が自由になりましたらば、私はお嬢さまに年中さういふお召物をお着せ申します」

「世の中がお前の自由になつたら、するぶん妙な事ばかり起るだらうね。ほ、ほ」

マ「あら、お口の悪いこと！」
 ノ「だけどマルサや、此様な他所着よりか着馴れた平常着の方が、よッぽと着心地が好いよ」

マ「ほんたうにお嬢さまは、男のお子さん見たいに、綺麗なお召物がお嫌ひですね。私、貴女がお嬢さまだといふことを、時々忘れてることが御座いますよ」
 ノ「あたしも時々忘れられるわ。それぢやマルサや、ちよツと出て来るよ」

牧師のジエンキンさんの所へ行つたつて、どうせろくな事はない、と思ひましたから、ノラは本道を横へ折れて、羊の通る狭い路を傳はつて、例の谷合へ下りて行く、此様な所へ今頃イリオットさんが來てる筈はないとは考へましたが、それでも若しかすると逢はないとも限らない。しかし自分はイリオットさんに見せようとて、態々こんな着物を着て來たんぢやない、と自分の心に言譯をしながら、歩いて參りますと、少しく川上の方で誰か釣をしてる。断りも言はずに他

人の地面へ來て釣をするなんて餘り圖々しい。どうやら都の人らしいが一體誰だらう。顔を見てやらうと、ノラは靜かに其男の方へ近付いて行きました。見ると新流行の旅行服に新調のゲートルを附けた瀟洒たる貴公子。だが釣は素人と見えまして、一寸の間に釣つた魚を三匹も逃してしまつた。ノラは釣の名人ですからそれを見てゐると齒痒くて仕様がなない。

ノ「もツと早く揚げなけりや駄目ですよ」

芝の上を音もさせずに歩いて來て、いきなり斯う話しかけましたから、先方はびくツとして振り向いた。

青年「貴女は何とか言ひましたか！」

ノ「ええ、竿をもツと早く揚げなければ駄目ですと言ひました」

青年「御注意ありがたう。僕は斯ういふ事には一向無經驗でしてな。貴女は釣りをおやりですか？」

ノ「いえ」

對手がいやに目尻をさけてるので、ノラはぶツきら棒に答へる。

青年「此近所にお住ひかね」

ノ「ええ」

青年「僕はいつも運が好いんだが、此川は始めてだから呼吸が分らない。ちよつと要領を示してくれ給へな」

ノラは少時躊躇して居りましたが、元來が活潑な娘ですから、青年の釣竿を受取つて、

ノ「もつと遠くへ投げなけりやア駄目です。それに此蚊針は大きすぎますわ。これちやア何様な魚だつて餌とは思ひますまい。そら、あの石の側に大きいのがります。今貴方の取り逃したのは、あれでせう？少し離れてるて下さい。私がやつて見ますから」

ノラは川の縁に立つて、鱒のゐる所へ軽く糸を投げると、一度で見事に引掛かつた。ほんとうの釣好きが此手際を見たら、心から讚嘆するでありませうが、魚よりも女を釣る事を考へてゐた件の青年は、ノラが大きな鱒を揚けたのを見て、絶好の機會と考へました。

青年「おツと、危ない！落ちると大變です」と、言ひながら、いきなり後からノラを抱えた。

ノ「あれ、およしなさい！」

ノラは眞赤な顔をして振りむいた。

青年「僕が抑えてあげたから好かつたが、もう少しで貴女は川へ落ちこちる所だつた」

嘘ばかり言つてる。

青年はノラがあきれてじつとしてゐるのを好い幸にして、益々自分の方へ引寄

せやうとする。その時、後の方にばたつといふ音がして、何者か青年の背中へ踏
びついたかと思ふと、青年はノラを放して、よろ／＼とよろめいて川の中へ轉が
り落ちた。ノラの危急を救つたのは何者かと申しますに、これは愛犬のボツブ、
牙をむきだして、川の縁に突立ち、青年が上つて來たら所構はず食ひついてやら
うと考へてゐる。ノラは青年の狼狽を見て、噴き出したくなつて來た。

ノ「大丈夫ですよ。立つて御覽なさい」

さう言はれて青年は漸く安心して立ち上つたが、犬が恐ろしいので、岸へ寄る
ことが出来ない。

青「それはお前の飼犬だな。射ち殺さなけりや承知しないぞ！」

ノ「ボツブが忠義を盡したのに殺すんですか、可笑しいことね。私が落こちさう
になつたんなら別ですが、何でもないので、貴方があんな事をするからよ。早く
お家へ歸つて着物をお換えなさいよ」

青「お前は此事を言ひ觸らすだらう。言ひ觸らすだらう」

紳士を玩弄物にした事を近所近邊の百姓に

ノ「紳士？紳士は何處にゐて？」

青「何だと！其様な生意氣な事を言ふか。此俺が誰だか知らないんだな」

ノ「知りませんよ。知りたくもないわ。先刻の釣りッ振では、ユルスワージー邊
の商店か何かの店員さんでせう？」

青「店員だと!? やい！俺は——」

イ「伺はなくても宜いことよ。早くお歸りなさい。ボツブや、さあ、行かう」

ノラは愛犬を呼んで、さつさと歸りかけた。と丁度其處へ馬でやつて來ました
のは、イリオット青年ノラとツブ濡れの青年を、かはる／＼見比べまして、

イ「どうしたんです？」

ノ「此の——お方が川へ落ちなさつたんです」

と口では答へたが、目顔で何か別の事を知らせる様子。

「どうして落ちたんです」

「ボツブの仕事よ。ボツブは屹度此方が私を——でも、そんな事は何うでも可いわ」

青「どうでも可かない。僕は釣りをしに来たんだ。愉快に釣りを——」

「あんまり愉快でもなかつたでせう。ああ釣れないでは、そんな事おツしやらないで、早く歸つて着物をお換えなさいまし」

青「それは僕の勝手だ。それよりもお前さんは誰だ。此邊の百姓家の娘だらう。それなら——」

イリオットは馬から下りて、尙もノラと青年の顔を見比べてゐる。

「此方はライオール家のお嬢さんです。貴方はライオール家の地面へ無断で這入つて來たらしい」

青年は少しく面喰つた。「僕はフェランドです。此邊は僕の親父の所有かと思つた。粗忽を謝します」

「フェランドさんの所有地は、半哩ほど下です。これからは其處へ入らして釣りをなさつたら宜しいでせう。此處ほど深くはありませんから」

器量を下けたフェランド先生、ヅブ濡れの上衣のボタンを掛けて、すごく〜と行つて了ふ。跡に残つた二人は少時その後姿を見送つて居りましたが、

「一體どうしたんです。僕はあの坂の上から見ましたが、あの先生は——貴女を——」

ノラは顔を赤くして、「私が川へ落ちこちると思つて——思つた振りをして、後からいきなり——」

「怪しからん奴です。宜しい！」

イリオットは馬に乗つて件の青年を追ひかけやうとしたが、ノラがそれを制し

て。
 ノ「およしなさい。あんな下らない人間に構うのは。あら、茲に釣竿と餌がありますよ」

ノラは其釣竿を執つて、罾を二匹釣つた。先刻からイリオットは不思議相にノラの姿を見守つて居ります。それも無理はありません。昨夜のノラとは違つて、今日は何處へ出しても立派な令嬢姿。かうも變るものかと、イリオットは感心しながら見惚れてゐる、ノラは對手が自分を見詰めてゐるのを知つて、恥かしさうに俯向きました。

イ「ノラさん、昨夜は失禮しました」

ノ「私こそ、いろいろ御厄介になりましたわ」

イ「僕はもう少し早く此處へ來合せると可かつたですね」

ノ「いゝえ、遅くもいらしたのが却て可う御座いました。喧嘩でも始まると、私困

りますわ」

イ「こんな所へ一人で來ちやア危険です。又た何處の奴が——」

ノ「あんな男に達つたのは始めてですわ」

イ「ノラさん、貴女は兄さんはいんですか。誰か貴女を保護する方は——」

ノ「父が居るばかりです。有りがたう御座います。私は誰も保護してくれる者がなくつても、大丈夫です」

イ「さつき坂の上から見た時は、僕は貴女とは思ひませんでしたよ。別荘の女の客かと思ひました。昨夜はほんたうに失敬しました。貴女を見違へて……」

ノ「今日私をお見違えなさつたよりか罪がありませんわ。ほゝゝほ。イリオットさん、もう送つて下さらないでも、これで澤山です。それから、今のフェラン

ドさんは、男爵の——」

イ「一人子息です。セルキンといひます。昨夜遅く着きました。僕は今度始めて

彼先生に遇つたんですよ。何でも佛蘭西とかへ行つてゐたとかで

ノ「歸つてゐらッしやらなければ可いのに！」

イ「さうですね。佛蘭西の損失ですよ。僕はセルウキン君に一言注意して置かな
けりやならない」

ノ「あら、よして下さい。何もおッしやつては困します」

イ「しかし——」

ノ「いゝえ。こんな私一個の事なんですから、あの方には何にもおッしやつては
困ります。何にも言はないと約束して下さい」

イリオットは仕方なしに約束した。さうしてノラ嬢の保護者の役目を勤めた愛
犬を羨ましがるかかのやうに、その背中を撫でました。

イ「僕が貴女なら、お父さんにさう言つて、此邊へ立て札をして貰ひますね。フ
エランド家の客が又たやつて来ないとも限りませんよ」

ノ「父は留守ですの。それに立て札の必要はありません。私共には番人が居りま
せんし、又た置くことも出来ません、貧乏ですから」

イリオットは大に同情して、

イ「僕は——僕が貴女の兄さんか親類なら可いんですがねえ。此邊の牧場は僕が
面倒を見て上げますがねえ」

ノラは青年の顔を見上げて笑ひましたが、すぐ淋しい顔付になつて「私には兄
弟が一人もありませんの。ありましたら何んなにか氣強いでせう。だけど、貴方
は私の兄さんではないし、又た親類に来て貰うだけの餘裕もありませんし」

イ「しかし、兎に角、セルキン君が二度と貴女に迷惑をかけないやうに、僕は氣
を付けませう」

ノ「もう其様な事はありますまい。貴方は今日の事をあの方に言はない約束でし
たね」

「それは大丈夫です。僕は約束を守ります」
それから二人は色々他の話をして、夕方別れを告げましたが、その晩ノラは寢床に這入つてから、長い間イリオットの事を考へ續けました。

四、妖婦アミリヤ

本講談の種本の組立ては一風變つて居りまして、第一回到女主人公を、第二回到主人公を紹介したし、第三回と本回とに於て、一人づつ他の主なる人物を拉して来る。よく活動寫眞で、主なる役を勤める人々を最初に大きく寫して見せる、あの筆法に似て居ります。で、本回は謂はば序開きの一部、従つて筋の運びが未だ緩やかであります、今少しく御辛抱をお願いいたします。

扱て、前回の出来事から五六日経ちました或夕方、ノラは居間に引籠り、青年イリオットの面影を心に描いて、獨りで顔を根くして居りますと、戸外に馬車の

音が聞えて、間もなく立關で止つた。今頃來客のある筈はないかと考へながら、窓から覗いて見ますと、意外にもお父さんのライオールの顔が見えたので、ノラは吃驚致しました。お父さんからは歸宅の前觸れがなかつたからです。

「『マルサや、お父さまがお歸りだよ』」

大きな聲で呼ばはりながら、ノラは内廊下を駆け抜けて、立關へ迎へに出た。が、急に立止つて、驚愕の眼を瞪りました。といふのは、今日に限つてお父さんのライオール元氣よく馬車から降り立つて、一人の婦人を扶けおろしてゐるところ、ノラは口をポカンと開いて、眼を皿のやうにして此婦人を凝視めた。派手な風をしてゐるが年は取つてゐるらしい。尤も、一寸見は中々の美人で、何處かに仇ッぽいところがある。ところが、頭髮も、眉毛も、血色も、何となく自然でない。人工的な趣がある。大分旅に疲れてゐる様子。のみならず、御機嫌甚だしく斜めらしく見受けられた。馬車を降りる時に、立關の構えから、あたりの様子

をチロリと見た其眼には、侮蔑と失望の表情がありました。

ライオールは件の婦人と腕を組んで玄關の石段を登つて来た。

「ノラ、今歸つたよ。驚いたかな。これは今度お前のお母さんになる人だ。アミリヤといふんだ」

驚きの餘りお父さんの傍へも寄りつかないノラに向ひまして、アミリヤは冷やかな笑みを投げ、女王のやうに傲然と點頭きながら、

「おお、ノラさん、私があんたのお母さんよ。あんたは吃驚してゐるやうね。無理ありません。お父さまも私も、結婚の事を秘密にして置いた方が可いといふ意見でしたの。私は物を大袈裟にするのが大嫌ひですからね。さういふ譯であんなに不意打ちを食したんですよ——あら、あんたは私に口を利いてくれないの始めて逢つて挨拶もしないの？」

ノラは喉の塊をぐツと嚙み下し、涙をこらへて、手を差し伸べ、

「お初にお目に懸ります」

「なんです見え、母さんに其様な挨拶をする子がありませんかね。キツスをするものですよ」

アミリヤは體を屈めて、嫌がるノラに接吻した。接吻したは可いが、ノラの鼻の頭へ一杯粉白粉をこすり着けちまつた。

「それで可いのよ。これから睦まじく暮しませうね。さうく、姉妹になりませう。私を母さん扱ひにしちや可くないことよ。あたし未だ若いんだもの。ねえ、ちよいと、貴郎、(とライオールに向ひまして)あたし草臥れちやつたわ。こんな長い間汽車に乗つたのは生れて始めてよ」

「うむ、うむ、さぞ草臥れたらうな、直ぐ二階へ行かう。ノラや、お前、あの、母さんを御案内しておくれ」

ノラの眼に表れた憤慨の色を見て、お父さんのライオールは俯向いた。アミリ

ヤは傍から、

ア「ちよいと、貴郎、母さんなんて言はないで頂戴よ。幾らも年の違はない娘に母さんと呼ばれちやア、やりきれないわ。滑稽ぢやないの？」

ラ「アミリヤを二階へ案内しておくれ」

ア「さうく、これから何時も名を呼んで頂戴よ」

ラ「マルサが御案内します」

女中のマルサが青い顔をして、體を顫はせながら出て來た。ライオールがアミリヤの後に跟いて行かうとすると、

ノ「お父さま！」

ライオールは娘に呼び止められて、二階へ上ることが出來ず、まごごしながら書齋へ這入つてしまつた。ノラはストーヴの前に立つて、ちいツと父の顔を見詰めたまま、一言も言ひません。お父さんのライオール、暫時は上目を遣つて娘

の顔を竊み視たり、うつむいて顎を撫でたりして居りましたが、とうく手持無沙汰に溜らなくなつて恐るく切り出した。

ラ「ノラや、お前に不意打ちを食はしたのは悪かつたかも知れないがね。アミリヤも先刻言つた通り、悪い氣でしたのぢやない。實はな、俺が後妻を貰うと言つたら、お前が腹を立てやしまいかと考へたんだよ。お前は今日まで此家の主婦だつたからな。俺が相談したら、お前が反對を唱へるだらうと思つてな、それで黙つてゐたんだ。そりやアお前が反對をしたつて、俺は結婚しやうと思つたら、結婚せずにはゐない。俺は一旦言ひ出したら、一步も後へ退かん。これが俺の性分だ。が、何と言つても、濟んで了つた事だから、お前も折れてくれよ。こちらから先、彼女と仲よく暮してくれ。誠に腹にわだかまりのない女でな、それに、何だその、縹緞も十人並み以上でな。彼女は誰にでも好かれるよ。だから、お前だつて、屹度——」

「お父様は何處で彼方とお知り合ひにおんななさつたんです。彼方は何ういふ方なんです。どうしてお父さまは……」

「何處で懇意になつたと訊くのか。それはなんだ、實際アミリヤは社交界に有名な婦人だよ、有名な女優だ。いや、女優であつたのだ。無論、第一流の劇場へばかり出て居たのさ。或晩、俺は友達に連れられて、或る劇場へ行つてな、その時、友達が紹介してくれたんだよ。俺は一目見て戀しちゃまつた。それから一緒に方々遊んで歩いた。それから先は言はずとも分るだらう。いや、お前の思つてる事は、俺にも善く分つとる。舞臺に出た婦人は、ライオールの家のやうな上流階級に入る資格がないと言ふんだらう？しかし、ノラや、彼女は普通の女優や何かとは、まるきり別だ。眞の淑女だよ。ある宗教家か——確か副監督だつた——の娘に生れてゐるのだ。それで、俺が妻にしてやつたと言ふよりも、アミリヤの方で俺の妻になつてくれた譯さ。俺の申込む一週間前に、現に彼女は或る侯爵の子息

を刎ねつけたくらゐだ」

なんかんと、ライオールは頻りに自分の立場を辨護致しますが、娘のノラは、父の言葉を眞實とは思はない。莫連女の手管に引掛かつて、とうとう此様な羽目になつたんだと、心の中では考へてゐる。その時、ライオールの新夫人が階段を降りて来た。いつの間にかけばくしい夜會服に着換え、胸や頭に僞せダイヤをこてくと光らせ、新しく眉毛を引いて、化粧くづれを綺麗に直してゐる。商賈柄なノラの早業です。

「ア、あら、貴郎、此處にゐらしたの？晩の仕度は出来て？……貴郎、随分古い家ね。化物屋敷ね、まるで、此室ばかりぢやないのよ。二階も、何の部屋も、家の周圍も、これで莊園が聞いてあきれれるわ、それに家具だつて、もう可い加減減けてるぢやないの。新調しなけりやア駄目よ。貴郎たちは、よくまア此様な所に辛抱が出来ることねえ！」

家の中をちろちろと見廻しながら毒づいた。ノラは起つて戸口の方へ歩きかけましたが、これを聞くと、立ち上つてアミリヤを眞面に睨みつけました。

「此處は私の家で御座います！」

ノラはくやしう溜りません。お父さんが後妻を持つたといふだけでも、不愉快でならないのに、えたいの知れない女が来ると早々、自分の住み馴れた家の悪口を言ふんですから、くやしいのも無理はない。その晩、自分の部屋へ引込んでからもノラはくやしう溜りません。長いこと眠れませんでした。

けれどもノラは、翌朝例のやうに早く起きて、家の用をしました。それから畑を一廻り廻つて歸つて来て見ると、お父さんのライオールがいはんぼりと食卓に向つて腰掛けて居ります。

「ノラや、お母さんは……」

「お父さま、お母さんなんて言はないで下さい。アミリヤと言つて下さい」

「可しく、お前がさうやかましく言ふなら、アミリヤと言はう。アミリヤはな、非常に頭痛がして、降りて来られんから、マルサに食事運ばせておいた。どうも、アミリヤは此家が氣に入らないやうだ。それけな、今まで彼女の生活して来た世界とは様子が異うからだ。田舎は、倫敦ッ兒には淋しいだらう。無理もない。それから彼女が言ふには——いや、俺もさう思ふんだが——此家も可なり——古くなつてゐるからな。彼女は今まで贅澤に暮して来たんだから無理もない。そこでな、勿論急に全部取替へる譯には行かないが、絨壇とかテーブルとか椅子とか言ふやうな物を、ボツ／＼と新調して行くことにしやうかな。吾々は慣れ切つてゐるが、彼女は家の中の様子を見て、ひどく驚いたらしい。勿論苦情らしい事は一言だつて言やしないが、その、なんだ、ちよつと俺に注意をしたんだ。お前は何う思ふかな」

ノラは情ないと言つたやうに父親の顔を眺めました。

「それは家も随分きたなう御座います。家具も新調しなければなりません。ですけれども、お金の出所がありません」

「いや、それは何でもない、月賦でも買へる。それから、アミリヤに何か巧い工夫があるだらう。相談して見やうよ。さうすれば彼女も元氣が出るだらう。畑の方は何んな案排かな。それはさうと、ノラや、お前の着物も少しく見すばらしいな。昨夜アミリヤがさう言つたよ」

斯う言はれると、ノラの眼は異しく光つた。

「アミリヤさんは直きに私の着物を見馴れます。兎に角、新しい着物を造るお金はないんですからね。お父さま」

お父さんのライオールは黙つて了つた。ノラは黙つて食事を済ませ、さつさと席を起つて食堂を出ました。と、其處に待つてゐた女中のマルサがノラを臺所へ引張つて行きました。

「お嬢さま、私は逆も我慢が出来ません。新しい奥様が被入したのは、よう御座いますけれど、ああいふお方では、私は勤まりません。附きつきりに附いてゐると、おツしやるんでは、一日あの方の御用をしてゐなけりやアなりません。私にあの方とは何うしても折合が附くまいと存じます。今朝も私の事を、何と言つてお呼びになるかと思ふと、をんな、をんな、とおツしやるぢやありませんか。私お暇を戴きます。代りがあり次第にお暇を戴きます」

「マルサや、あたしお前にそんな事言はれると、悲しくなるわ。お前の他に頼りにするものがないんだから、どうか私を可哀相と思つて、我慢をしておくれ。ね、後生だから」

ノラは唇をふるく顫はせて、今にも泣き出しさう。それを見ると、マルサは溜らなくなつてひいとノラを抱きしめました。

「お、お嬢さま、私が悪う御座いました。あの化け狐に大事なお嬢さまを任し

て溜るもんですか。私は我慢を致します。いつまでもお嬢様の御相談相手になりますから、さア、もうお泣き遊ばすな。奥さまさへ御在世なら、お嬢さまがこんな惨めな想ひをなさることは御座いますまいに、ほんとうに、旦那さまも旦那さまです』

ノラはマルサが「化け狐」と言つたのを聞いて、たしなめやうとは言つたが、實際なんですから、どうする事も出来ません。とにかく、マルサが居てくれると言ふので、ほつと安堵の胸を撫でおろして、それから氣晴しに戸外へ出掛けました。家の中はアミリヤが来てから、既う安香水の匂で一杯になつて居ります。その下等な匂ひに引換へて、牧場の匂ひをノラは何様にか快く思つたではありません。一旦外へ出ると、ノラは強い心に返つた。今マルサに抱えられて泣いてゐた自分を恥かしく思ひました。さうして、奇妙な事には、繼母のアミリヤを殆ど忘れて了つて、イリオット青年の事を頻りと思ひ浮べるのであります。

午頃家へ歸つて見ると、アミリヤが食堂で待つてゐた。

「今歸つたんですか。あなたは今まで何してゐたのさ」

「働いてゐました」

「働いて？何をして働くの？」

「牧場でバタを拵えて居りました。今朝は食事の前に牛舎を見廻りました」

「へえ、あなたが其様な仕事をするの？それは労働者のする事ぢやアないの？家にはさういふ仕事をする人間を置いとかないんですか」

「一人しか居りません。それで仕事が澤山ありますから、農場の方はいつも私ができるんです」

「さう、それでは私は騙されたんだわ。お父さんの話では、田舎のお大盡だと思つたのに。まあ、さうですか」

「お大盡では御座いませんが、私共はこれで此邊の家柄で御座います。ライオ

「ル家は何百年も續いて此土地に往んで居ります。父は貴女を騙したのでは御座
いません」

「家柄が善くたつて貧乏ぢや何にもならないわ。そりやア、あたしはあんだの
お父さんに向つて、財産が何れ程なんて、そんな事を訊きはしませんよ——若い
女が其様な事を口へ出して訊かれやしないからね——だけど、もう少しは家らし
い家へ連れて来てくれるんだと思つたんです。女中や下男の五六人づゝもゐて、
馬車が二三臺あつて、それから——」

「お氣の毒さまです。私共にはザツな田舎馬車が一ツあるツきりです。それが
農場用の馬の外には、小馬が一匹居ります。私の騎る小馬が——」

「小馬？それでもないよりかマシだね。ねえ、貴郎、今ノラにさう言つてると
ころなんですがね、小馬がゐるさうですから、小馬の曳く馬車でも一臺買つて下
さい。あたしは方々へ出掛けなけりやアなりませんから」

ライオールは心配さうに娘のノラを眺めた。

「可いども、可いども。馬車に乗つて近在を廻つて見るかな。ノラの事だから
喜んで馬を貸してくれるだらうよ」

「貸してくれるですつて？馬は此家の馬でせう。ノラの所有ぢやアないでせう
尤も、私の乗つて歩くものさへあれば、それは何うでも可いけど、貴郎に言つて
置きますがね。私見たいに貴婦人で育つて来た者は、田舎の泥溝泥道をてくる譯
には参りませんからね。(食卓の上に並べられた料理を輕蔑の眼でチロリと見なが
ら) 食べるものは、これツきり？私は何も食道樂ぢやありませんが、こんなもの
では、とても——」

「あのノラや、マルサに吩咐けて何か他の料理が出来たらうな。ボーチド、
エツグか何か。アミリヤは、これでなか——」

「ボーチド、エツグ？そんなものは食べませんよ。もつと甘いものを捲え

「ル家は何百年も續いて此土地に往んで居ります。父は貴女を騙したのでは御座
いません」

「家柄が善くたつて貧乏ぢや何にもならないわ。そりやア、あたしはあんたの
お父さんに向つて、財産が何れ程なんて、そんな事を訊きはしませんよ——若い
女が其様な事を口へ出して訊かれやしないからね——だけど、もう少しは家らし
い家へ連れて来てくれるんだと思つたんです。女中や下男の五六人づゝもゐて、
馬車が二三臺あつて、それから——」

「お氣の毒さまです。私共にはザツな田舎馬車が一ツあるツきりです。それか
ら農場用の馬の外には、小馬が一匹居ります。私の騎る小馬が——」

「小馬？それでもないよりかマシだね。ねえ、貴郎、今ノラにさう言つてると
ころなんですがね、小馬がるるさうですから、小馬の曳く馬車でも一臺買つて下
さい。あたしは方々へ出掛けなけりやアなりませんから」

ライオールは心配さうに娘のノラを眺めた。

「可いども、可いども。馬車に乗つて近在を廻つて見るかな。ノラの事だから
喜んで馬を貸してくれるだらうよ」

「貸してくれるですつて？馬は此家の馬でせう。ノラの所有ぢやアないでせう
尤も、私の乗つて歩くものさへあれば、それは何うでも可いけど、貴郎に言つて
置きますがね。私見たいに貴婦人で育つて來た者は、田舎の泥溝泥道をてくる譯
には參りませんからね。(食卓の上に並べられた料理を輕蔑の眼でチロリと見なが
ら) 食べるものは、これツきり？私は何も食道樂ぢやありませんが、こんなもの
では、とても——」

「あのノラや、マルサに吩咐けて何か他の料理が出来るだらうな。ボーチド、
エッグか何か。アミリヤは、これでなか——」

「ボーチド、エッグ？そんなものは食べませんよ。もつと甘味しいものを拵え

させて下さい。尤もあの女には、そんな物しか出来ないかも知れない。料理なんかカラツキシ知らないんだから、ほんとうに彼様な女中ツて有りやしない。今朝の珈琲は宛然とぶ泥見たいでしたわ。あんなでは私には逆も我慢が出来ません。もう少し氣を付けて私の吩咐を守らないと、暇をやりますから。飲むものは何があるんです？」

「ラ」麥酒でも持つて来させやうか。自家製だが一寸飲めるよ」

「ア」そんなものが飲めますか。さうく私ウキスキーを一罎持つて来たツけ。二階の化粧臺に載せといたわ——さうぢやなかつた——トランクの底の方へ納つたツけか。あんな女が一ツ家にゐては、迂濶にウキスキーの罎を其處らへんへ出しちやア置けませんよ。ノラさん、お前好い兒だから、ちよつと二階へ行つて持つて来てくれない？」

ノラは仕方なしに罎を取りに行きました。ところがアミリヤの部屋へ這入つて

見ると、安香水の匂ひがブン／＼と匂ふ。けば／＼しい色合の着物がダラシなく脱いである。テーブルの上の酒杯には、底の方にウキスキーが残つてる。アミリヤは仕酒杯で先刻聞し召したらしい。ノラはトランクの中から罎を取り出して、逃げるやうに部屋を出ました。

アミリヤはノラから罎を受取つて、酒杯になみ／＼と注いで、

「ア」あたし晝間は餘りやらないんだけど、妙に氣が沈んで仕様がなから——旅のセイだらうと思ふわ——それから貴郎や、食後に近所を一廻りして見ませうよ。どんな家があるんだか、どんな人が住んでるんだか。それが知りたいの。あたしは交際好きなんですから、これでも、あたしなんか、社會の一番の上流と交際して来たんですから——」

ウキスキーの酔が發して來ると、アミリヤはそろ／＼管を巻き始める。そこでノラは可い加減に食事を切りあげ、小馬に騎つて外へ出掛けました。

「ああ、どうしてお父さまは彼様な女と結婚なさつたんだらう。私達の家は此先どうなるか分りやアしない。だけど、今更何と言つたツて取返しは附かないんだから、私も我慢しなければならぬ」

お父さんのライオールが好い年をして浮氣を起したばかりに、ノラは餘計な心配をしなければなりません。

五、フロラ嬢の下心

お話變つてイリオット青年は、フェランド男爵の野良息子がノラに向つて、怪しからぬ舉動に及んだのを見て、ひどく憤慨して居りますが、一切秘密を守ることを約束したので、残念ながら何うすることも出来ない。

「しかし、どうも此儘に済ますことは出来ないぞ。あんな奴はウンと懲しめてやるに限る。好い工夫はないかなア。何しろ、ノラ見たいな娘を一人で歩かせる

のは危険だ。俺が彼女の兄貴なら可いんだが——赤の他人であつて見れば、先方で断はるのを、無理に出しやばる譯にも行かず。なぜ、俺はノラの兄貴に生れなかつたらう。實際立派な淑女だ。男爵邸の女客なんかよりか餘ッ程立派だ。彼女に一言口を利かされると、俺は妙に體がぞくぞくするよ。不思議だなア。よく小説なんかには其様な事が書いてあるが、俺は今まで嘘とばかり思つてた。しかし實際だ。俺のやうな大男が、あんな小さな娘に、さうしろと言はれると、どうしても、さうしなければならなくなる。不思議だなア。俺が此様な心持になつたのは今度が始めてだよ」

こんな事を考へ考へ、イリオットは谷合を通り越して、男爵邸の裏の方へとやつて参ります。其處にはイリオットの寢泊りする小屋と幾棟かの馬舎が立つてる。前にも一寸申上げて置いた如く、イリオットは三人の助手を使つて、男爵の馬匹養殖の事業を引受けてゐるのです。

扱て、イリオットが自分の小屋の間近まで参りますと、向ふの方から一臺の二輪馬車を驅つて来る婦人がある。これは男爵邸に逗留してゐるフロラ、バートルといふ例のはね上りです。イリオットと擦れ違つたと、フロラ嬢はいきなり聲をかけて、

フ「此路は男爵邸へ行けて？」

イ「行けません。引返して暫時行くと、左へ曲る路がありますから、其處をお曲りになれば、直ぐです」

フ「さう、有りがたう」と言つたが、フロラは始めてイリオットを見た時から憎からず想つてゐるのですから、此處で逢つたのを幸ひ、何とかして親密にならうといふ下心の

フ「あたし路に迷つちまつたのよ。あんまり退屈したから、此馬車を貸して貰つて、ひとりで戸外へ遊びに出掛けたんですけど、此馬は全速力で走らなけりや満

足しないと見えて、先刻から方々驅けすり廻つて、やうやうと此處へ来て止つてくれました」

イ「此處を知つてゐるんです。此僕を知つてゐるんです。いつでも僕が菓子をやりますから」

フ「それでは私よりも偉いわ。貴方は何といふお名前？」

イ「僕はイリオット、グレナムと言ふ者です」

青年は平氣で答へる。ノラの前へ出ると、妙に氣が臆するけれども、此フロラには平氣で口が利ける。

フ「貴方は此處で何をしてゐなさるの？」

イ「男爵の馬の世話をしてゐます。」

フ「さぞ面白いでせうね。私、馬が大好き。まあ、まるで夏のやうね、今日は、何て暑いでせう」

「此土地は四月になると、よく斯ういふことがあります」

「すみませんが、何か飲むものを持って来て下さらない？」

「さうですね、水ならあります」

「結構ですわ」

イリオットは小舎へ這入つて行つて、コップに水を一杯注いで持つて来た。

「ありがとうございます。私貴方の馬を見せて戴きたいわね。可けなくって？」

「御覽になりたければ、お見せしますとも」

腹がへつてゐるので、此様な女に掛り合つてゐては五月蠅いとは思ひましたが、むけに拒絶する譯にも行かず、イリオットはフロラを馬舎へ案内した。

フロラは小馬を小舎の前へ繋いでゐる青年の後姿を眺めながら、「どう見てもうちの善い方のやうだが、どうしてフェランド邸の使用人なんかになつてゐるんだらう。ひよつとすると、此人は男爵の何かの計畫の道具に使はれてゐるんぢやあるまいか」と、妙に氣を廻してゐる。

イリオットはフロラを案内して、馬舎を見せて歩いたが、或る馬舎の前へ来たフロラが牝馬の傍へ近寄らうとすると、牡が怒り出して、すんでの事にフロラに噛みつかうとした。かくと見て驚いたイリオットはいきなりフロラの體を抱えて軽々と安全の距離へ運んでやつた。

「ありがとうございます！貴方はするぶん力があるわねえ。私もし貴方を怒らすやうな事があつたら、貴方に打たれない中に謝罪するわ。ほんとうに御厄介をかけて済みませんでした。馬はみんな貴方に懐いてゐるのね。貴方が親切になさるからよ。だけど、強い方は屹度親切で優しいのね？」

「さうですかア」

イリオットは女にお世辭を言はれるても一向嬉しさうな顔もしない。

「又た馬を見せて戴きに來てよ、可いこと？」

フロラは離れともない様子をして、秋波に男の顔を見ました。ノラに斯様な風をされたら、それこそイリオットの心臓は飛行機のモーターのやうな音を立てるでありませうが、對手がフロラでは一向有りがたくもない。儘ならぬは戀の道と古人も言つて居ります。

「イ」いつでもお氣が向いたら被入しやい。御案内します」

イリオットはフロラを送つて、乗り棄てた馬車の方へ歩き出すと、向ふから男爵の一人子息のセルキンがすく／＼とやつて参りました。頭の先から足の先までズブ濡つになつては、いかな色男も臺なしです。

「イ」あら、セルキンさん、どうしたんです！」

「セ」川の中へ落ちちたんです——魚を捕まえやうと思つて、なに何でもないので、すよ」と答へましたが、フロラの傍にイリオットの居るのを見て、

「セ」君は此處で何をしてゐるんだ」

「イ」この御婦人を馬車へお乗せしやうと思つてるところです」

「セ」それは僕がする。君は自分の仕事をしたら可いだらう。どんな仕事か知らないが」

けれどもイリオットは對手の言葉を耳にも入れずに、フロラを馬車に扶け乗せ鞭を渡して、扉を閉めた。フロラは少時二人の青年を見比べて居りましたが、手綱を執つて、

「フ」セルキンさん、お家まで乗せてつて上げませうか」

「セ」いや、ありがたう。僕は歩いて行きますせう」

「フ」さう？ それではお先へ失禮」とフロラは微笑を残して、馬車を驅つて行つた跡には二人の青年、互の胸には先刻からわだかまりがある。セルインはイリオットに對つて極めて横柄に、

「セ」おい、お前が誰だか、何をしてゐるか、僕は知らんが、お前は僕の親父の召

使だらうな」

イ「まあ、さうでせうな」

セ「僕は一體お前の行ひが氣に食はん。お前は少しく傲慢な所があるやうだ。自分の地位を考へて見るが可い」

イ「僕は自分の地位を知つてる。僕は川の中にはゐないよ。僕が君なら、さつさと家へ歸つて着物を着換へるね。風邪でも引くと大變だ」

セ「餘計なお世話だ。お前は今の女に話したらう。俺が水に落こちたことを」

イ「いや、一言も話さない。僕は君の事をすっかり忘れてたんだ」

セ「よろしい、覚えてろ」

イ「何だと？」

忌々しい奴だ、横面引ばたたくぞ、とよッぽと言つてやり度かつたが、ノラへの約束を想ひ出して、イリオットはぢつと我慢した。意氣地なしのセルキンは、

相手の權幕を見て恐ろしくなつたが、尙も虚勢を張りまして、

セ「お前の事を親父にさう言つてやる。親父はお前の人物を善く知らないんだ。知つてたらお前を使つてるやしまい、とにかくお前は明日の朝解雇になるから、さう思つてゐるが可い」

イ「さうかなあ、僕はさう手取り早く解雇されるとは思はないがなア。僕は男爵をよく知らないが、充分の理由なくして使用人を解雇するやうな人ではあるまいよ」

セ「お前はさう思ふのか。よろしい、それなら俺が解雇する」

イ「僕は男爵から解雇して貰ひ度いね」

此時人の足音が聞えたが、二人は夢中になつてゐて、氣が付かなかつた。お坊ちやんのセルキンは對手がイヤに落着き拂つてゐるのを見て、むかむかとした。

と「何を？無禮者めが！」

と叫んで、一足前へ進んで、右腕を振り挙げた。が、イリオットの腕力に敵う筈はありません。イリオットは左の手でセルキンの腕をしつかりと掴み、右の手を舉げて、對手に一撃を加へやうと致しましたが、又ノラとの約束を想ひ出して躊躇した。此危機一髪の際間に、後から「こらッ」と聲を掛けたものがある。イリオットが振りかへつて見ると、フェランド男爵です。男爵は少しく息をはずませて、二人の青年に近づき、

男「お前達は何をしてるんだ。セルキン、一體何だ？」

セ「此奴は失敬な奴です。家に置く譯には行きませんから、私が解雇を言渡してやりました」

男「彼が何をした。それからお前は何うしたんだ。體中つぶ濡れのやうだが——」
セ「私はなんです——な——その——ちよつと過つて川へ落ちました。或る娘が——」

男「娘？さうか、……又た例の癖を出したんだな。さうして此處にゐるイリオットが邪魔をした、それでお前が馬鹿を見た、さうだらう？イリオット、お前は何か言ふ事があるか」

イ「何ありません」

セ「此男は解雇しなけりやア可けません」

男「それは、考へて置かう、お前は早く家へ行つて着物を換えい。先へ行け。俺は直ぐ後から行くから」

子息が行つて了ふと、フェランド男爵は火の消えたシガーを頻りと吸ひながら黙つて居りましたが少時するとイリオットに對ひ、

男「悴と喧嘩をしては困るな。お前は短氣だから可かんよ。それではお前の不爲めだ。人間短氣では出世は出来んぞ。セルキンの言ふ事なぞ氣に懸ける必要はないではないか。俺は此處の主人だ。俺が出て行けと言ふまでは、お前は此處に

ゐるが可い。分つたか？」

イ「分りました」

男「セルキンとは成るだけ避けて逢はんやうにせい。お前達は離れてゐる方が宜しい」

イ「さうです。時に、先日お買ひになつて牡馬は人に噛みつく癖があつて困ります」

男「さうか」

男爵は點頭いて、踵をめぐらし、家の方へ歩き出しましたが、一寸振り向いて、男「その娘と言ふのが一體誰だ」

イ「ライオールさんです」

男爵は立ち止つてイリオットの顔を見詰め、唯一言。

「さうか」と言つて、さつさと子息の後を追つた。男爵は間もなく子息に追ひつ

いた。

セ「お父さん、彼奴は——」

男「彼を解雇してくれといふのか。それは可かん。解雇することは出来んよ」

セ「出来ないんですツて？」

男「うむ、出来ない。たとへ出来ても、俺は解雇しやうとは思はん。とにかく此問題は之で打切りだ。お前が馬鹿な事をやるのは、これが始めではない。これから少し氣をつけろ。お前は彼男を避けてゐるが可い」

セ「え？彼奴を避けるんですツて？彼奴は召使ぢやありませんか。お父さん、僕は此様な變挺な理屈は聞いたことがありません」

男「今聞いた筈だ。彼男は中々使へるから、解雇する譯には行かない。俺が暇を出すまでは、此處に居るのだ。おい、セルキンお前は裏口から這入つた方が可いだらう。まるで濡れ鼠のやうだ」

セルキンの坊ちやん、仕方なしに悄然と裏口へ廻つて行きました。

六、思はぬ嫌疑

セルキンはお父さんの男爵が妙にイリオットを最負するのを見て、むしやくしや致しましたが、もどく／＼自分の方に後暗いところがあるんですから、我意を通すことも出来ません。お父さんに裏口へ廻れと言はれて、家人に見付らないやうに狐鼠々と裏道を歩いて参りますと、間の悪い時は悪いもので、向ふから来た妙な男にばつたりと出會つた。古ぼけたフロックコートに、同じく時代後れのシルクハット、營養不足らしい顔をして、頭を前方へ突出しながら、ひよ／＼と歩いて来た此男は、フエランド男爵邸といふ背景とは何うしても調和致しませんセルキンも最初はやり過すつもりでありましたが、その男がニヤリ／＼笑ひ始めたので、忽ち肝癪を起した。

セ「やい、一體全體貴様は何者だ。何で氣味の悪い笑ひ方をするんだ」

男「いや、失敬？ 貴公の様子が餘り滑稽なので、ツイ笑ひました。川へでも落ちたんですな」

セ「貴様は誰だ。此處へ何の用があつて来たんだ。無斷で他人の邸内へ這入り込むと——」

男「い、え、私は用事があつて参りました。男爵にお目に懸らうと思つて伺ひましたので」

セ「さうか、俺の親父に逢ひに来たのか」

「俺の親父」と聞いて、件の男は吃驚仰天、急に米つきばつたのやうに、頭をびよ／＼下け始めた。

男「いや、どうも誠に御無禮を申上げました。さう致しますと、貴方さまは男爵の御令嗣で御座いますな。知らぬこととは申しながら、飛んだ失禮を致しました

平に御海恕をお願ひ申し上げます。ツイお見それ申しまして、はい。此前にお目に懸りましたのは、たしか、六七年前で御座りました。それに貴方さまはお召物が——」

セ「やかましい！無禮な奴だ！俺は貴様なんか見覚えがないぞ」

男「私はストライプレーと申します者で。はい、御尊父さまの——フエランド男爵閣下の祕書で御座います。貴方様と知りましたら、私には笑うやうな、さやうな大膽な事は出来なかつたので御座いますが、はい」

セ「親父は彼の小路を歩いてる。貴様の今の行爲に就いては、俺は親父に報告するつもりだ。向うへ行け！」

ス「はい、かしこまりました。今日の處は何うぞ御内分にお願ひ致します。私は何誰か他所の御仁と思ひましたので……」

セルネンは何とも答へずに、さつさと行つて了う。

ス「親父が親父なら、息子も息子だ。いや息子の方が差をかけてやがる」

ぶつく言ひながら、ストライプレーは歩き出しましたが、少時すると、男爵が伐り倒した木へ腰をおろして、ぼんやり煙草を吸つてゐる所を見付けました。

男「おお、ストラプレーか。何か急の用事でもあるのか」

ス「はい、今朝お手紙が二通参りました。一つは濠洲の方から、今一つは鑑定人から参りましたので。はい」

男「見せろ、お前は郵便の来る前に事務所へ出て居つたか」

ス「はい、御命令通り出て居ります。私は閣下の御命令を戦々兢々として遵奉して居りますので、はい。ボーイから、今日の高い地位へ御登用下さいました閣下の御高恩を考へますと、私は決して……」

男「うむ、此手紙の返事はお前から傳へてくれ」と、ギリ、ロバーツ鑑定事務所所のゴム印を捺して状袋を軽く叩きながら、早速此方取掛ると言つてくれ。そ

れから二度と此件に就て手紙を寄越さんように、よろしいか。用事があれば、俺が逢ひに行く」

ス「濠洲からのお手紙は、如何致しましたら宜しう御座いませうか」

男爵はストライプリーの營養不足の顔をヂロリと眺めて、「それは俺から返事を出す。事務所の方は何も變つた事はないか？」

ス「はい、私は充分の責任を持ちまして、閣下の御不在中は殊に注意を致して居りますので、はい」

男「さうか。それでは歸つたら可からう。大丈夫夜汽車に間に合う。俺はお前の來た事を、みんなに知られては都合が悪いのぢや」

ス「御尤もで御座います。はい、お客様が何か事件が出来たと——お考へ遊ばすと、宜しう御座いません。はい」

男「貴様は、俺が他人の思惑を兎や角氣にかけると思ふかッ！事件出来た？そりやア何の事だ。馬鹿者めッ！何んな事件が出来するんだッ？」

ス「いえ、事件なぞ出来る筈が御座いません。はい、私はさういふ積りで申上げたのでは——」

男「さつさと行け。停車場前に宿屋があるから、彼處で何か食つて行くが可い。

これを曲つて何處までも眞直に行くんだ。それ！」と男爵は犬の魚の骨でも投げてやるやうに銀貨を一枚投げ出した。「俺は後から行く。いつ何時行くかも知れんぞよろしいか？さア、早く行けッ！」

ストライプリーは銀貨を拾ひ、再び、恭しく脱帽して、引きさがりましたが曲り角を曲つて了うと、赤い舌をペロリと出した。

ス「兩方とも嚴封してありやアがつたから、何だか分らないが、鑑定人から來た奴は、吉報に相違ない。親玉の顔の相好でちやんと分つたよ。鑽石の鑑定を依頼したところが、その報告が好かつたに違ひない。何だらうな、銅かな、それとも

石炭かな、一體何處から見本の鑛石を持って來たのだなア。それから今一通の手紙よ。濠洲から來た奴——あれは何だらう。濠洲からはいつでも封書で來るが、何の用件だか、さっぱり分らない。秘書の俺は天から信用しないんだから、駄目だよ。親玉もああ見えて智慧が足りないテ。俺を信用して掛かる方が得なんだがなア。これには何か祕密があるに違ひない。よろしい、いづれ其内に濠洲から來る手紙を見てやらう。ようツ、好味い匂ひがするぞ！」

ストライプレーは、いつの間にかイリオットの小舎まで歩いて來ると、開け放つた扉からビフテキを焼く匂ひがしたので、溜らなくなつて、其戸口へ忍び寄つたが、直ぐとイリオットに見つかつた。

ス「これは失禮！通りかかりに、ちよつと——あの——覗いたばかりなんです。泥助ぢやありませんから、御安心を……」

イ「どうです。這入りませんか」

ス「宜しう御座いますか。御食事のお邪魔ぢやありませんかな」

などと云ひながら、のそりく——這入つて來て、食卓の前へ陣取つた。圖々しい男もあればあるもの。

イ「別に御馳走はありませんが、自由にやつて下さい」

ス「これはく、どうも飛んだ御迷惑をかけました……」

空腹の絶頂に達したストライプレーは、イリオットの盛つてくれたビフテキ、食バシを目たく間に平けて了ひ、まだ後を欲しさうな顔をしてゐる。

イ「もツと上げませうかね」

ス「すみませんな。イヤ誠に結構な味加減、私は料理の中で、このビフテキが一の好物です。倫敦にゐては逆も此様な好味いビフテキは食へませんよ。田舎は好いですが。食物は好味いし、木は青々と茂つてるし、かういふ所に住んでるし、實際永生をしますよ」

お世辭を言ひながら、二皿目をペロリと平けて了ひ、イリオットの注いでくれたビールを一息に飲み乾した。

イ「どうです。もう一皿」

ス「結構ですな」

段々圖々しくなつて來た。三皿目を食べたると、ストライプレー先生も、少しはけんなりしたと見えまして、椅子に反りかへつて、満足相に主人の顔を見ながら微笑した。

イ「一服やりませんか？」

ス「いや何から何まで有りがたう存じます。食後の一服は健康上大層宜しいさうで、私實はパイプを持つて居りますが、生憎煙草が品切れになりましたな」

イ「煙草は此處にありますから」と煙草入れを渡す。ストライプレーは煙管に煙草をつめて、火を點けました。

ス「結構なお住居ですな。失禮ですがお名前を承ることが出来ませうか」

イ「私はグレレアム——イリオット、グレレアムと言ふ者です。貴下は？」

ス「私はストライプレーです。今日用件を帯びて倫敦から参りました。父た夜行で歸るのです。なんですか、貴方は——此處で何か仕事をなさつて被居しやるんですか。失禮ですが……」

イ「え、フエランド男爵の馬匹養殖の仕事を引受けて居ります」

ス「ははア、なるほど、結構な御仕事ですな。私も馬は大好きですよ。失禮な事を伺ひますが、貴方は御當地のお生れですか」

イ「私は濠洲生れです」

斯う聞くと、ストライプレーの小さな眼が異様に光りました。

ス「濠洲は好い國ですなア。私は未だ一度も行きませんが……私は休暇を貰うと大抵マーゲートに出掛けます」

イ「え、なか／＼、好い所です」

ス「大金儲が出来るさうぢやありませんか」

イ「大損もありますな」

ス「いかにも、さやうですなア。何處へ行つても事業家は儲けたり損をしたりです。…すると、貴方は濠洲よりも矢張り此英國がお好きなんで。…」

イ「好きとか嫌ひとか、そんな贅澤を言ふ身分ぢやありません。來なけりやアならない譯があつて來たんです」

ス「恐れ入りましたな。で、男爵の御別荘で職業をお求めになつた譯なんですな」

イ「さうです」

ス「よく出來たお方ですなア、男爵は。世話好きで、思ひやりがあつて、物事に注意深くつて、頭が好くつて、男爵のやうなお方は、倫敦廣しと雖も、先づ有りませんな。すると、貴方は出世の蔓を捜さうといふお考へで、遙々濠洲からお出

掛けになつたんですな、まア、早い話が。…」

イ「さうです。實は親父が事業に失敗しました。…一季に四萬頭からの羊を殺しました」

ス「四萬頭？大層なもんですなア。して、フェランド男爵とは偶然の機會で、お知り合ひになられた、さうでせうな。人間の知り合ひといふ奴は全く縁ですな」

イ「偶然でもありません。私は男爵を知つてゐたんです。ひや、男爵の方で私を知つてゐてくれたと、言つた方が正しいかも知れません——どうです、麥酒をもう一杯注ぎませうか」

イリオットは迂濶に男爵との親族關係を喋つてはならぬと氣がついて、ビールで紛らさうと致しましたが、對手もさる者、イリオットの様子を素早く見て取つた。

ス「いや、ありがたう。實に結構なビールです。此の土地で出來たんでせうな私

「此邊は全くの不案内ですが、何か名物と言つたやうなものがありますかな。例へば、銅とか石炭とか、此邊に鑛山は何うですありませんか」

「五六マイル先に銅山がありますが、近頃は廢坑になつてます。探り盡したんでせう。此のライオール家の所有地に續いた谷合にも、古い銅山があります」

ストライプラーは狐が鶏の巢を嗅ぎつける時のやうに、大きな耳を立てました。

「ス」へえ。それは耳よりな話ですな。銅は近頃大暴騰です。はあ、なるほど、此邊に銅山がありますかな。なるほど實に面白い事を伺ひました」

「イ」貴方に面白ければ、私も満足です。貴方は銅の方には特別の興味をお持ちなんでしょうか」

「ス」私が？ いや、少しも、別段どうのかうのといふ譯ではありません。さあ、あんまり長閑な事があると、汽車に乗りはぐれますから、お暇を致しませう。グレアム

さんとおツしやいましたッけな。どうも飛んだ御馳走に預つて、御禮の申しやうもありません。どうぞ、これから御懇意に願ひたいものです。私は或要件で男爵にお目に懸りに参りましたもので、只今では男爵の祕書を致して居ります」

「イ」さうですか。又たお目に懸ります。それでは、此路を何處までもゐらして、左へお曲りになれば、大道へ出ますから、それを真直にゐらッしやると停車場へ行きます」

ストライプラーはイリオットに送られて、五六間歩くと、ちよつと立ち止つて何氣なく、

「ス」好い景色ですなア。これが皆な男爵の所有地なんですか」

「イ」あの並木の所までがさうです。あの向ふはライオール家の地面です」

「ス」ライオール家？ ははアさうですか。いや、どうも有りがたう御座いました。さようなら」

イリオットに別れを告げまして、ストライプラーは何か頻りと思案に耽りながら、やつて参りましたが、男爵邸の門を出ると、礎と太腿を打つて、

「分つた！ グレアムだ！ 何年か以前に濠洲から男爵を尋ねて来た人が、グレアムと言つたよ。あの人の顔は今でも想ひ出せる。今のイリオット、グレアムにそっくりだ。すると、今の青年はあの人の息子に相違ない。それが男爵の家で働いてゐる、男爵の馬の世話をしてゐる。さうして男爵の所へ濠洲から始終手紙が来る。それから此邊に銅の山がある。ははア、これには何か譯があるぜ。男爵と来たら、なかくの仕事師だからなア！」

ストライプラーは何を考へたか、少時すると、會心の笑みを洩しました。

七、青天の靄露

ライオール家の家運は十何年來下り阪でありましたが、新夫人アマリヤが参り

ましてから、急劇に傾きかけた。借金の利息を支拂ふ爲めに、折角ノラが取り除けて置いた金も、新夫人の着物や、馬車や新しい家具に費されて了ひました。

前にも述べた如く、田舎の金持ちと思つてライオールと結婚したアマリヤは、來て見ると案に相違して、ひどく失望しましたが、其の失望は、ライオール家の交際が牧師夫婦と二三の百姓に限られてゐることが知つて、益々深くなつた。或日の事、アマリヤは良人に向ひまして、

「何故家ではお隣りの別荘の人達と交際しないんです。私達の相手にして不足のない連中ぢやアありませんか。ねえ、貴郎、向ふから來ないから、此方でも出掛けないといふんでせう？ 貴郎の理窟は、向ふから來ないのは當り前ぢやアありませんか。あの人は私達と交際したつて一文の徳があるぢやアなし、誰が私達のやうな貧乏人の所へ御機嫌伺ひに來るものですか。此方から交際を求め筋道ですわ。昨日なんか、私がケチな二輪馬車で出掛けると、あの人は最新型

の立派な四輪車に乗つて、大威張りでやつて来るぢやありませんか。私、生れて始めてです、こんなに気が引けるのは……なぜ、貴郎はああいふお金持と交際しないんです。それだから、いつ迄経つたつて、ウタツが上らないんですよ。フェランド男爵は、あれでなく、人をそらさない性質らしいから、此方から交際しかければ、高く留つたりなんかしませんよ。こんなむさくるしい家にくすぶつてゐるよりか、ああいふ人達と往つたり來たりして、面白おかしく暮した方が、どんなに善いか分らない。それでこそ少しは人間らしい生活が出来るんですわ」

ライオールは妻君と娘の顔を氣遣はしげに眺めまして、

「アミリヤ、お前には事情が分らないかも知れないがね。あのフェランド家は成上り者だ。吾々の眼の前へ俗ッぽい別荘を建て居つて、何かにつけて金持ちを見せつけやがる。あんな人間は、俺は大嫌ひだよ。俺は彼奴等よりも高く棲つてゐるんだ。それに、彼奴等は金持ち、吾々は貧乏だから、對等に金を遣つて交際す

る譯には行かないのだ」

「それがつまらない見榮坊です。先方へ行つて御馳走になつたつて、何も同等の返禮をしなくたつて可いぢやありませんか。先方では、そんな返禮をして貰はうとは思つてやしませんよ。それに、家にはノラといふ年頃の娘がありますよ。

これから立派な相手を見付けて、出世をしようといふには、上流の子息さん達の澤山出入りする——」

かう聞くと、ノラは顔を眞赤にして起ち上つた。

「お父様、私羊を見廻つて來なければなりませんから」

「羊?! お前さんは其様な事しか考へてゐないのかえ? 水飲百姓の娘見たいに、野良で働くことしか考へないのかえ? それで一廉のお嬢さま氣取りだから、あきれんぢやアないか。羊なんか何うなつたつて構はないから、フェランドさんのやうな金持と惡意にする工夫をおしなさい。だけど、お前やお前のお父さんに、こ

んな理窟を言つて聞かせたつて、馬の耳に念佛だわ。私も行末はさぞ樂が出来でせうよ！自分と同じくらゐの年恰好をした立派な娘がぶら／＼してゐるんだから」

ノラは繼母の嘲弄を黙つて聞いてはゐられないので、とう／＼逃げ出した。氣晴しに馬にでも騎らうかと思ひましたが、アミリヤが夕方馬車で出掛けると言つてゐたことを想ひ出しまして、仕方なしに、愛犬のボツブを連れ、羊を放し飼ひにしてある小山の方へと歩を運んだのであります。ところが、一つの曲り角へ來ると、ボツブが急に耳を立てて吠え出した。何事であらうと不審がつて、彼方を眺めると、一人の男が腰を屈めて、何か地面の上を捜してゐる様子。

「又た別荘に泊つてゐるお客が、他の地面へ這入つて來たのかしら」と考へながら、段々と近づいて行きますと、その男の顔が瞭然と見えて來ました。意外にもそれはフェランド男爵でありました。「男爵が今時分こんな所へ來て何をしてゐる

んだらう」とノラは好奇心に驅られて、足音を忍ばせて歩いて行く。先方は頻りと何かやつてゐたので、ノラの來たことを知りませんから、ひよいと顔を擧げて自分の眼の前に若い女の姿を見付けると、ひどく狼狽しまして、慌てて石のやうなものをポケットへ突込み、ちよつと帽子を脱つて、

男「ライオールさんのお嬢さんぢやありませんか」

ノラは何とも答へずに、唯だ心持ち頭を低けて通り過ぎやうとする。と、フェランド男爵はノラを呼び留めまして、

男「お嬢さん、私はお宅の地面へ無斷で這入りましたことをお詫をしなければなりません。いや、二重のお詫をしなければなりません。承りますれば、忤も私同様侵入の罪を犯したさうでありますから。尤も忤はお宅の地面といふことを知らずに踏み込んださうですが、私には其辨解する事も出来ません。實は先刻から少し頭痛がしましてな——私共のやうな實業家は、大抵頭痛持ちでありますで、散歩で

もしたら癒らうかと、一人でぶらくやつて参りましたところ、此花を見付けますと、ハイ之に氣を取られました、ウカ〜と境界を通り越したやうな次第。どうか御宥恕を願ひたい。悴の方の事もお宥し下さい」

男爵はポケットから二三輪の蘭の花を取出して、笑ひながらノラに見せた。

ノ「花がお好きならば、どうぞ御自由にお採り下さいまし」

男「ありがたう御座います。さう御親切に言つて下さると、私も之を御縁に御交際を願ひたく存じます。お隣同士でありながら、今日までライオールさんとお近附になる折がありませんので、甚だ遺憾に思つて居ります。ライオールさんは定めしお多忙でありませうから、私から伺ひませう、それに親しくお目に懸つてお詫も致さねばならず——」

ノラは顔を赧くしました。ノラは、いろ〜の理由でお父さんがフェランド男爵と知り合ひになるのを好まないのがありますが、此時には、お父さんの今度結

婚した女を、男爵なんかに見せては氣まりが悪い、といふ心持が一番に浮んで来たのです。

ノ「いゝえ、そんな事をなさるには及びません。父は生憎多用で御座いますし、人様にお目に懸るのを臆劫がる性質で御座いますから」

男「あゝ、さうですか、それでは何れ其中に御近づきになる機会もありません。

長閑な日ですなア！貴女も御散歩ですか」

ノ「私は羊を見に参りました。あ、それで想ひ出しましたが、先達ては私共の牛がお邸へ迷ひ込みまして、さぞ、お庭を荒したらうと存じます。今度は私がお詫を致さなければなりません」

男「なあに、そんな事は何でもありません。あれは私の方にも責任があります。塙根の手入れを充分にして置かないのが悪いのです。なんですか、その牛をお捜しになるのは、別段お骨は折れませんでしたらうな」

「はい、何誰か男の方が手傳つて下さいましたので、直ぐ捜せました」
 男「ははア、私共の使用人ですか？あゝ、さうです。想ひ出しました。イリオツトでせう。イリオツト、グレアム、あれは中々感心な男でした。お役に立つて誠に喜ばしう存じます。早速塙根を塞がせることにしませう。又た貴女に御面倒をかける可けませんから」

「ありがたう存じます。それでは失禮いたします」

ノラは男爵に別れて小山を登つて行く。男爵はそろ／＼と歸途に就きましたが、ノラの姿が見えなくなると、片手をポケットに突込んで、何か探つて見ながら、
 「見られなかな花を探りに来たと言つてやつたが、彼の娘は眞に受けたかな年齢に似合はず、なか／＼油断のならない娘だわい。しかし、見たつて、想像はつかないからう。なあに、どうだつて構ひやしない。見つからなかつたとしておく」

男爵は四邊をぎろ／＼見廻して、今度は威勢よく歩き出しました。

お話變つて、ノラは足にまかせて一時間ばかり、野山を跋涉いたしました。心の憂さは晴れません。疲れ切つて、木の根方に腰をおろし、家の事や、繼母の事など、それからそれと考へ續けて居りますと、自然と深い溜息も出る。先刻から彼方の木蔭に隠れてノラの様子を窺つて居りました一人の青年が、此時つか／＼と歩みよりまして、

青年「ノラさん、貴女は何うして此様な所に一人でゐるんです。貴女は今溜息をしたぢやありませんか。一體どうしたんです。何か心配事でもあるんですか」

ノラはイリオツトの姿を認めますと、青ざめた顔を颯と赧らめて、
 「えゝ、でも幾ら心配したつて駄目ですから、我慢しますわ、私、もう歸ります、さようなら」

「ちよつとお待ちなさい。僕が来たからつて、何もそんなに急いで歸るには當らないでせう。其の心配事といふのを僕に話してくれませんか。お役には立たないかも知れませんが、とにかく僕は貴女のお力になりたいと思ふんですから。」

ノラは笑顔を造つて、青年の凜とした姿を頼母しけに見上げました。

「それは、別段入つた事ではありません。私共の農場が段々荒れてしまひます—あの、私共は借金が出来て困つて居りますの。お金が欲しう御座いますわ。それに父が結婚いたしましたして……」

「さうですが」

イリオットは低い聲で言ひました。アミリヤの噂は、かねて聞いて居りますので、ノラがどんなに苦勞をしてゐるかといふことは、イリオットには大抵想像が出来るのでありました。

「邸も地面も抵當に這入つて居ります。これはもう誰でも知つてる事なんです。」

「で、その苦勞を貴女が一人で背負うんですか。うむ、分りました。そんな残酷な事があるもんか、立派な男子だつて一人で背負ひきれぬものではない。まして、貴女は、女で、年齢が若い。それに他に相談相手といふものがない。いや、貴女には僕といふ相談相手があります。しかし、僕も何うして好いか分りません。僕に金がありさへすれば……昔のやうな資産がありさへすればなア！しかし、今日の僕は、貴女も知つての通り……」

「貴方の御親切はよく分つて居ります。私、どうして貴方がさう親切に言つて下さるかと思ひますわ。私のやうな者の……」

「不思議に？僕も今までは自分にも分りませんでした。しかし、今は分ります。それは、僕が貴女を——戀してゐるからです。さうです。戀です。僕は朝起きると晩寝るまで、貴女の事ばかり考へてゐる。いや、夢にまで貴女を見る。貴女の

「で、その苦勞を貴女が一人で背負うんですか。うむ、分りました。そんな残酷な事があるもんか、立派な男子だつて一人で背負ひきれぬものではない。まして、貴女は、女で、年齢が若い。それに他に相談相手といふものがない。いや、貴女には僕といふ相談相手があります。しかし、僕も何うして好いか分りません。僕に金がありさへすれば……昔のやうな資産がありさへすればなア！しかし、今日の僕は、貴女も知つての通り……」

「貴方の御親切はよく分つて居ります。私、どうして貴方がさう親切に言つて下さるかと思ひますわ。私のやうな者の……」

「不思議に？僕も今までは自分にも分りませんでした。しかし、今は分ります。それは、僕が貴女を——戀してゐるからです。さうです。戀です。僕は朝起きると晩寝るまで、貴女の事ばかり考へてゐる。いや、夢にまで貴女を見る。貴女の

顔を見ないと、仕事も何も手につきません。かうやつて貴女と一緒にゐれば、僕は何とも言へない幸福を感じるのです。ああ、僕の此の心持ちを、どうかして説明したいが、僕には出来ない。貴女は笑つてますね！笑はないで下さい。それから怒つちや可けませんよ。貴女を怒らせちや大變だ。僕は何も此様な事を口へ出して言ふつもりぢやなかつたんですが、ツイ喋つて了りました。しかし、喋つて善かつた、僕はもう一遍言ひます。僕が貴女に同情するのは、貴女の力にならうと思ふのは、貴女を戀してゐるからです。おや、貴女は泣いてますね？泣かなくつても可い！」

「泣いてはゐませんわ」

口には言ひましたが、青年を見上げにノラの眼は涙に曇つて居りました。さうして、其の眼の中には、娘らしい驚きと、氣遣はしさど、不思議な歡喜の表情がありました。青年はノラの手を痛いほど堅く握りしめて、

「それでは貴女は怒つちやゐませんか？」

「え、でも、そんな戯談を——いふ、私、決して戯談とは思ひませんわ。貴郎のお心を嬉しく思ひますわ。でも、私をよく御存知ないのに——」

「それが何です、僕は生れた時から貴女を知つてるやうな氣がします。こんな事を言つても、貴女は怒りませんね？氣にしませんね？」

「え、私、却て嬉しく思ひますわ。父の外に私の事を其様に思つて下さるのは、貴方が始めですもの——今では父も……」

「それを聞いて僕は嬉しい。それでは僕を力にしてくれますね？これから度々顔を見せてくれますね？」青年はノラを引寄せて、「ノラさん——一度で可いから、僕に——ね？キッスしても可いだらう？」

「可けません。そんな事——」

顔を眞赤にして逃げようとしたが、ノラは青年の眼に表れた懇願の表情に抵抗

「可けません。そんな事——」

顔を眞赤にして逃げようとしたが、ノラは青年の眼に表れた懇願の表情に抵抗

することが出来ませんでした。イリオットはいきなりノラを抱擁して、顫へながら其唇に接吻を與へました。

二人な少時恍惚として居りましたが、下の方に馬車のきしる音が聞えたので、ノラが先づ驚いて青年の抱擁から自分の身を引き離し、夢からでも覺めたやうに、四邊をきよろくと見廻した。と、その瞬間に、自分のした事が分つて、ノラははッと思つた。

「私、もう行きますわ、留めないで頂戴、歸らして下さい」

ノラは急いで吾家へ戻り、眞直ぐに自分の部屋へ行つて、ほてつた顔を洗ひました。すると、階下の食堂で、アミリヤが金切り聲を出して、頻りと何か言つてゐるのが聞えましたが、その中に「ノラ、ちよつとお出で！」と呼ぶ。ノラは何事が始まつたかと、おどろししながら階段を降りて見ると、お父さんのライオールが、眞赤な顔をして、廊下を往つたり來たりしてゐる。

「ノラ。お前に用がある。アミリヤの話では——さあ食堂へ遣入れ——アミリヤの話では——しかし俺には信じられん、これは何かの間違だらうと思ふ。」

「ア」なんです、貴郎！貴郎があんまり優しくするから、彼女が増長するんです。アミリヤは食堂のテーブルの傍に立つて、にくさけにノラを眺めながら、始めました。「間違ですって？馬鹿な事をおツしやい！あたしが此の二ツの眼で見たんですよ。ノラさん、只今はお娛しみましたね！へん！いやに、高く棲つて、つんくして、目上を塵埃か何ぞのやうに思つてゐるくせに、——お嬢さん、貴女はいつでも此の私を見下けてゐらッしやるわね。その貴女が何です。露天の、しかも山の上で、男に抱かれてさ！いゝえ、お黙りなさい！私は二つの眼でちやんと見たんですからね」

お父さんのライオールは、はらくして二人の顔を見比べてゐる。ノラは不思議に落着き拂つて、じつと繼母の顔を見詰めながら、黙つてゐる。

「ア」として、貴女は言ひ、
 と逢引をなさるんですね。お嬢さま！
 らうよ、馬丁を好い人に持つてはね。
 お前さんも、ずるぶんお伶俐者ですよ。馬丁、情人にして！ほ、ほ、ほ。それぢや御身分に障りやアしませんかね」
 ノ「イリオット、グレラムさんの事ですか。あの方は馬丁ではありません」
 ア「何だい、白を切るつもりかい」

アミリヤは、いきなり跳びかかつて、平手でノラの顔をピシヤリと打つた。
 ノラに一時は目がくらんで何も分らなかつた。それから彼女は保護を求める子供のようなイヂらしい眼付を父親の方へ向けました。しかし、ライオールは一言も言はずに、ぶる／＼顫ひながらつつ立つてゐる。
 ノラは半ば知覺を失つた人のやうに、よろ／＼と廊下へ出ました。すると先刻

八、奸計

から蔭で様子を聞いてゐた女中のマルサが、顔を眞青にして駆け寄つた。
 マ「お嬢さま！お嬢さま！おお、お可哀相に！大事な、大事な、お嬢さまを——」
 後は言葉も涙なりと言ふところです。けれどもノラは親切に慰めてくれるマルサを振り拂ひ、片手を壁にかけて、廊下を探りながら戸外へ出て了ひました。

外の涼しい風に面を吹かれると、ノラは今更のやうにアミリヤから受けた侮辱を感じました。アミリヤは亂暴にも可憐なノラに打擲を加へたのである。しかし、ノラは肉體の痛みには殆ど氣が付かない。唯だ、彼女の胸は此の大なる侮辱に對する憤滿の情を以て張り裂けようとしてゐた。
 ノラは少時歩いてから吾家を振りかへ、
 嫌惡の念にぶる／＼と身を顫はせました。懐しい亡き母、
 出に幾年月を送つた吾家、氣まぐれな、我儘な父

を相手にしながらも、健氣に貧と戦つて来た其の恨城とも言ふべき吾家、それは遂に大侮辱の舞臺となつた。「もう家へは歸らない。あれは私の家ではない。お父さまもお父さまだ。長い年月、私はお父さまの爲めに、一生懸命に働いて、あるだけお父さまに樂をさせて上げようと思つてゐた。それなのに、今夜は、私がひどい目に逢はされるのを、眼の前に見てゐながら、お父さまは少しも私を庇つて下さらない。お父さまもあんまりだ」と、ノラは父親に對しても、幾分嫌惡の念を起しました。

しかしながら、家を出て何處へ行かう。これから先、何うして生活を続けよう。廣い世間に一人の身寄りもないノラは、火の出るやうに熱る眼で暗闇を凝視ながら、少時は途方に暮れて居りました。

その時、四邊を憚るやうな低い調子で「ノラや、ノラは何處にゐる」と呼んだのは、確かに父の聲。それを聞くと、ノラは再び打たれでもするかのように、身

を縮め、暗所へ隠れて待つて居りました。すると、家の中からアミリヤが「貴郎！ 貴郎！」とヒステリーのやうに呼び掛けたので、お父さんのライオールは引返して行く様子。その足音の消えたのを待つて、ノラは再び女關へ忍び入り、其處に掛けてあつたマントを取つて、これを身に纏ひ、頭巾を目深に引被つて、戸外へ飛び出しました。

飛び出しては見たものの、何處へ行く的もない。しかし、とにかく人に見咎められないやうに街道まで出ようと、ノラは考へた。それには何うしてもフェランド家の地面を突切らなければならない。幸ひ、男爵邸の本館から街道へ出る迄の間に樅の樹の林がある。あの林の中を行けば人に見付かる心配はないと、考へまして、急いで其事へ歩み入り、少時は夢我夢中に進んで行きますと、低い垣根に行き當つた。ところが、その時、近くに人の話聲が聞えたので、其聲のする方を窺つて見ると、二人の男が小徑をぶちくと往つたり來たりしてゐる。一人はフ

エランド男爵、今一人はトラニヨンと言つて、ノラの父を二三度訪ねて来たことのある辯護士です。二人はノラの隠れてゐる木の傍まで来て立止つた。

辯「すると、男爵、それは確かな事實ですか？」

男「確かとも。ギリ、ロバートの鑑定なら決して間違ひはない。ねえ、君、金が轉がつてるやうなものだ。吾々はそれを拾ひさへすりやア可いんだ。なに、探掘は別段困難ではないよ。ところで、彼の地面の抵當權は君の手にある。若しくは君の依頼人の手にある。それは何れでも差支ないが、その抵當權を僕が譲り受け度い。其處で君に相談するんだ。僕は何事をするにも、まはりくどい遣り方は嫌ひだからねえ。それに此問題に就ては、少しも後暗い事はない。どうだ、君に利益の三分の一を提供する。僕の見込が違はなければ、三分の一だつて、莫大な金額だぜ。君が何をしたつて、逆もこれだけの金は儲からないよ。此事業には莫大の資本が要るんだから、僕が三分の二を貰う。人の噂にきくと——怒つちや困

るが——君には資本がない」

ト「そりやアさうです。なるほど貴方の提案は、吾々双方に取つて有利だ。それでは一つ契約書を作りませうかな」

男「よろしい。僕の一言は證書よりも確かなのだが、君の希望なら契約書を拵へても可い」

ト「圖面はありますか」

男「ある。あの木の下へ行かう」

二人はノラの直ぐ前へやつて参りました。すると、男爵はポケットから一枚の紙片を取出し、蠟マツチを擦つて、トラニヨン辯護士に紙片の見えるやうに、それをかざし、

男「これだ。大體の見取り圖だが、位置はよく分るだらう？」

トラニヨンは少時黙つて圖面を見て居りましたが、

ト「此處ばかりですか、それがあるのは」

男「うむ、其處ばかりだ。すっかり踏査して見たが、他にはない」

ト「さうすると、男爵、貴方のお考へになるやうに樂には行きませんが」

男「え？ どういふ譯だ」

ト「此處のところは抵當に這入つて居りません」

男「何を言ふんだ。これは所有地の一部ぢやないか」

ト「さうです。ところが此部分は抵當に入れてありません。これは抵當者が妻君

の娘の財産として取除けたのですから、自分では處分することが出来ません」

かう言はれると、フェランド男爵は何とも言へない當惑の表情を浮べました。

男「駄目かな、尤も——」

ト「妻君に死にましたから、娘を相手にしなければなりません」

男「さうすると、益々面倒だ。相手が未成年者だからね」

ト「さうです。しかし、遺言状によると、娘が十八歳に達すれば、此財産を受け

継ぐことにしてあります。本人は、もう二三週間で満十八ですよ。ところが此娘

といふのが、なかくしツかり者でしてな。とにかく、これが承諾しなければ、

どうすることも出来ません。残念ですなア」

男「残念とも、偉い金儲けだからね。それに、吾々の成敗が小娘の手に依つて左

右されると思ふと尙更ら残念だ。しかし、何とかしなければなるまい。一ツゆッ

くりと相談しようぢやないか、向うへ行つて」

ト「さうしませう」

そこで二人は本館の方へ歩き出した。ノラは其姿の消えるのを待つて、ほつと

安堵の胸を撫でおろし、垣根を乗り越えて、間もなく街道へ出ました、さあ、こ

れから何方の方角へ行つたものか。最初は停車場の方へ歩かうと思ひましたが、

終列車は既う出たし、第一、それでは途中で追手に捕まる心配がある。そこでノ

ラは反對に海岸の方へ歩き出した。村を通ると、見知つた人に逢ふ虞れがありま
すから、裏道を選んで歩くことにした。それこそ、夢路を辿る心持ちで、夢我夢
中に足を運んでゐる。

何時間歩いたか分りませんが、夜がほのくくと明けかかると、ノラは次第に疲
勞を覚えて来た。けれども、農家へ立寄つて休んだり、食物を貰つたりする譯に
は参りません。仕方がないから、小川の水を飲んで、一時空腹を凌ぎ、少時其處
に休息して、又た歩き出した。六時頃、山阪の絶頂まで辿り着くと、向ふの方に
ポーラシユの港町が見えたので、ノラは幾分元氣つきました。彼處へ行けば食べ
るものを賣つてゐるだらう。何か食べて、それからガタ馬車にでも乗つて何處かも
ツと大きい都會へ出掛けやうと、勇み立つて、山阪を降り始めましたが、ひよ
いと路傍を見ると、自分と同年輩の男の子が地面に腰をおろして、頻りとトラン
プ札を弄つてゐる。少年はトランプに夢中になつてノラが傍へ來るのを知らずに

ゐましたから、顔を上げて其姿を見ると、吃驚したやうな顔をして、素早く札を
掻き集めた。

少年「お前は猫みたいだな。歩くのに音がしねえぢやねえか。何だつて他人の傍
へ寄つて來やがるんだ」

ノ「ポーラシユの町まで何のくらゐあつて？知らない」

少年「知つてるよ。それを訊いて何うするんだい」

ノ「あの町まで歩いて行くんだから」

少年「何しに行くんだい。勤め口けえ？お前草臥れてるやうだな」

ノ「遠方から歩いて來たんだもの」

少年「そんなら、此處へ坐つて休みねえよ。俺も休んでるんだ。俺だつて遠方が
ら歩いて來たんだぜ。これから運試しに舟乗りにならうと思つてるんだ。運試し
てえは、お前トランプ知つてるか。面白いぜ。一番勝負しようぢやねえか。其處

へ坐りねえよ。まだ早いからボーラツシユへ行つたつて、店は皆な閉つてらあ。さあ、何をやらうかなア、俺は一シリング賭けるぞ」

ノ「あたしはトランプなんかしないことよ。少しか持つてないお金を、取られちやア大變だから」

少年「だつてお前損なんかしやしねえよ。錢賭けるのが嫌なら、何か他のものを賭けてやらうぢやねえか。俺らは之れが飯よりか好きなんだ。正直な話、俺らが今迄ゐる店を逐出されたなア、此爲めだよ。錢を賭けるのが嫌なら、かうつと、お前その襟止めを賭けねえか。本金ぢやアあるめえ？俺らは錢を賭けてやらア」ボケツトから銀貨と銅貨を五六枚取出して、両手の中でぢやらく振つて見せます。

ノ「金よ。貴方は未だ年齢が若いのにトランプがそんなに好きなの？今にしくじりますよ」

少年「そんなお説教みたいなこと言ふなよ。もうさんぐばら聞かされて、耳にタコが出来てらア。本金だつて？ほんたうか。そんならお前の言葉を信用して、俺らは其の荷物の中に這入つてる服を賭けてやらう。まだ新しいんだぜ。お前の襟止よりか高價いぜ。なあに心配しなくつて可い。俺ら服なんか取られたつて構はねえや。船へ乗りやア又た新しいのが出来らア」

ノ「あたしトランプなんかしないわ」と、ノラは頭を振つて、早足に歩き出した少年は怒つたの怒らないのつて、悪口雑言の有りつたけを並べて、ノラを罵りました。ノラは不良少年などに掛り合つてはろくな事はないと考へまして、何と言はれても對手にならないで、五六間歩いて行きましたが、不圖一案を思ひ浮べて立止まつた。あの男の子の荷物の中に服が一着這入つてゐる。それを何とかして手に入れば、自分は男の子に化けることが出来る。さうすれば何處へ行つたつて生活の途はある」と考へつた。これが他の時でありましたらば、斯様な

突飛極まる考へは浮ばなかつたのでありませうし又た例へ浮びましても、それを實行する氣にはなれなかつたでせうが、何しろ、追手に捕まらない中に何處かへ逃げようといふ一心ですから、ノラは轟く胸を鎮め、何けない風を装ひまして、件の少年の休んでゐる所へと引返して参りました。それを見て喜んだのは少年です。

少年「お前、トランプするけえ？」

ノ「いゝえ、トランプはしないけれど、此襟止めと貴方の服と取換えッこしない？」

少年「トランプで勝てば、無價で取れるぢやねえか。俺らが札を切るから、どれでも好いのお抜きよ。點で勝負するんだ。點の多い方が勝さ」

ノ「あたし貴方の物をタダ取るのは嫌だわ。此の襟止めで買ひませう」

少年「お前は餘ッ程おツかなびツくだなア。襟止めを丸損するのが心配なんだら

う。そら！仕方がねえから、くれてやれ！そんな服持つてッて何するんだ。町へ行つて賣るつもりか。弟にでもくれてやるのか」

少年は束にした服をノラの方へ押しつけ、ひつたくるやうにして、ノラの手から襟止めを受取つた。ノラは顔をそむけながらその束を拾ひあげました。

ノ「えゝ、——どうだか分らないわ。さようなら」

少年「そら、此ステッキもまけてやれ。これへ其束を通して擔いでくと可いや」
けれども、ノラは振りかへらずに、急いで此場を立ち去りました。それから一町ほど阪路を下りますと、畑の向うに一軒、壊れかかつた小屋が立つてゐた。着物を着換えるには屈竟の場所と、ノラは四邊に人のゐないのを見すまし、畑を横切つて、其小屋の中へ這入つて行きました。

九、妖婦の成功

お話が前へ戻ります。ライオールは、妻君に呼ばれて家の中へ這入りましたが妻君のアミリヤは恐ろしい権幕です。

ア「貴郎！何處へ行つたんです！」

ラ「ノラを捜してたんだ。アミリヤ、お前は——その、少し手荒かつたよ。ノラは——あれで、なかく勝氣だからね——今まであんな目に逢つたことがないんだから——」

ア「い、え、其處です。誰も頭を抑えるものがないから、ああいふ我儘な——みだらな娘になつたんです。今までは、彼子が女主人のやうにしてゐたでせうが、もう今では私が女主人ですから、彼子に承知させなかりやなりません。私は、此家へ来てから、するぶん長い間我儘をしましたよ。私が始めて来た晩から、人を

馬鹿にしたぢやありませんか、どういふ譯だか知らないけど——とにかく身分から言つたつて、私は彼子と同等ですよ。私の父は——」

ラ「俺は娘の事が心配でならないよ。おそろしく腹を立ててるからね。彼子は今まで指一ツ觸られたことがないんだから——なんだよ——アミリヤ、お前が彼様な事をしてくれなかりやア可かつたんだ」

ア「えッ？すると貴郎は、私に我慢しろと言ふんですか？私にやア出来ません。あんな小娘に馬鹿にされて黙つてゐられますかよ。自分のお腹を痛めた子だつて我慢は出来ませんよ。懲しめになつて可いんです。一晩外にゐて考へたら、自分の悪い事が分るでせう。誰が此家の女主人だか分るでせう。それが少しでも早く分れば、早く分るほゞ結構です。貴郎みたいな貧乏人と結婚して、こんな田舎で一生暮さなきやアならなくなつてサ、此上、子供に馬鹿にされちやア、やりきれませんよ。私は、皆なから大騒ぎされてたんですからね。嫁かうと思へば華族の

奥さんにだつてなれたんですからね。ばか／＼しい！放置つて置きなさい！朝まで考へたら物の道理が分るでせう。さア、二階へ行きませうよ。私、もう寝ますから、貴郎もお寝なさい。今夜は既う彼様な淫弄者のお相手は眞平ですよ」

さん／＼御託を並べて、アミリヤは二階へ上つて行きました。しかし、ライオールは階下の廊下を往つたり來たりして、娘のノラが長い年月、親切にしてくれたことを、始めてしみじみと考へた。階段の下の柱時計が十二時を打ち、一時を打つても、ノラは歸つて來ない。さあ、ライオールは心配で心配で溜りません。「繼母に顔を打たれて、娘は何様に怒つてるだらう。くやしく思つてるだらう。ああいふ氣性だから、二度と此家へ足踏みをしない決心かも知れない。もしさうだと、人を頼んで捜して貰はなけりやアなるまい。しかし、そんな事をすれば、世間の口がうるさい。家の恥をさらすことになる」

それやこれやを考へますと、ライオールは溜らなくなつて、食堂の棚にあつた

ウキスキーを一杯引掛け、當てもなしにノラを捜しに出掛けました。牛小舎から裏の畑、畑から牧場と、ノラのゐるさうな場所を隈なく駆けずり廻つて、聲を囁らして娘の名を呼びましたが、何の音沙汰もない。とう／＼夜露にぐツすと濡れて、疲れ果てた足を引きずり／＼吾家へ戻つて來た。と、その物音を聞きつけまして、アミリヤが二階の階段の上へ姿を現し、

ア「見つかつて？あら、見つからないの？仕方がないわ、放置つておきなさいよ」
 ラ「雨が降り出したよ。ノラはさぞ困つてるだらう。まだホンの子供だから——」
 ア「なアに、彼女は大丈夫ですわ。夜歩きには馴れてますから。さあ、二階へお上りなさいよ。玄關の扉を開け放しにしとけば、勝手に這入つて來て寝ますよ。貴郎を困らせようと思つて外にゐるんです。ほんとに、あんな猫ツかぶりの根性曲りツたら有りやしない！」
 ラ「今直ぐ行くから、お前は先へお寝、あんまり遅くまで起きてると、又た頭痛

でもすると可けないよ」

アミリヤはふくれツ面をして引込んで行きました。果して寢室の扉をガダビシと閉める音が聞えた。ライオールは書齋へ這入つて、煙管を取り出しましたが、娘の事が気がかりで、悠々と煙草を吸つてることが出来ません。そこで、又た戸外へ飛び出して、方々捜して歩きました。しかし、いくら捜してもノラは影も形も見えない。とうとう此様な事をして一夜を明したライオールは、心痛の爲めに眞青になつて、ぶる／＼顫へながら、寢臺の上へ體を横へました。これが丁度、ノラがポーラシユの町を見おろす山阪の絶頂へ辿り着いた刻限であります。

しばらく、うとう／＼して、ライオールは目を覺しました。「朝飯には歸つて来るだらう。ひよつとすると、既う歸つてゐるかも知れない」かう考へまして、ライオールは寢床から跳ね起き、轉けるやうに階段を降りて行きますと、女中のマールサが、兩手を揉み絞つて、悲歎の涙にくれて居ります。

マ「お嬢さまは夜通し戸外へ出てゐなされます！私は窓の所で夜通し見張りをして居りましたが、お嬢さまは、とう／＼お歸りになりません。ああ、お可哀相に！大事なお嬢さまは——私がお小さい時分から、吾子のやうにお育て申したお嬢さまは、とう／＼彼の女に追ひ出されておしまひになつたんです。あのえたいも知れない女に——」

マ「靜かに！俺もお前と同じやうに、彼女の仕打ちには困つてゐる。しかし、マールサや、お互に注意して、此事を世間へ洩してはならんぞ。ノラの行先は分つてゐる。ネルスワージーへ行つたに相違ない。俺が行つて連れて戻るからな、さう心配せんでも可いよ。なアに、ちよつとした口論だからな。これ、マールサ、俺もお前と同じやうに心配してゐるんだぞ、それでも俺は落着いてゐる。お前も氣を落着けてくれ。これから出掛けて行つて連れて戻るからな。お前、奥さんのところへ珈琲を持つてつてくれたか」

「い、え、持つてきません。いやで御座います。奥さんだつて、私に持つて来て貰うのは、お嫌でせう。私はツケく言ひますから」

「うむ、さうか、可し、可し。俺が持つて行く。頼むから、事を荒立てないやうにしてくれよ。ネッドに馬車の仕度をしろと言つてくれ」

ライオールは、そこへに食事を済ませ、二輪馬車を驅つてネルスワージーの町へ娘の捜索に出掛けましたが、一向に手掛りがありません。途中で顔を見知つた百姓に訊ねても、ノラを見たといふ者は一人もない。ライオールは既う何うすることも出来なくなつて、悄然と吾家へ引返して参りました。ところが見ると、女關先に一臺の立派な馬車が停つてゐる。それは見覚えのあるフェランド男爵の馬車であります。ライオールは男爵に逢ふのが嫌なので、物の五分間も女關の外で愚圖々々して居りましたが、いつまで其様な事をしてゐる譯にも行かない。思ひ切つて家へ這入つて見ると、應接室の扉を開け放して、アミリヤとフェランド

男爵が話をしてゐる。ライオールは思はず唇を噛んで苦い顔付をいたしました。けれども、妻君のアミリヤは珍しく上機嫌。

「丁度好い案排で御座います。主人が戻りました。貴郎、こつちにお這入りなさいまし。男爵が態々お訪ね下さいましたのよ」

ライオールは迷惑相に這入つて来た。けれどもフェランド男爵は、それを氣にする様子もなく、

「やあ、ライオールさん。實は昨日貴方の御所有地へ踏み込みましてな。そのお詫かたぐお伺ひしたやうな次第です。今、その事を奥さんにお話しましたところ、貴方に代つて、私の詫を叶へてやるとおっしゃるのですよ。お嬢さんからもお聞きでありませうが、私は昨日お嬢さんにお目に懸りましてな」

「私是一向知りません。しかし、其事ならば、お詫などとおつしやるには及びません」

するぶん無愛想な男だと腹の中では考へましたが、フエランド男爵は満面に笑みを浮べまして、

「ところが、ライオールさん、私が今日お訪ねしましたのは、お詫をする爲めばかりでもないのです。勿論、私は新たに女神が——奥さんが此稱呼を用ひることをお許し下さるならば——降臨せられたことを、噂に承つて居りました。で、是非私共へも御來臨を願はうと存じまして——どうも此邊には立派な方が少なう御座いまして、私共も誠に淋しい思ひを致して居ります。何の風情も御座いませんが、お揃ひで御出掛け下さいませんか。實は妻が私と一緒に伺う筈で御座いますが、折あしく持病の頭痛が起りました。いや、どうも體の弱い爲めに、皆さんに失禮を致して居ります」

「まあ、それは可けませんこと！私、奥様には是非御交際をお願い致します。う存じます。どうぞ、お歸り遊ばしたら、よろしくおツしやつて下さいまし」

「フ」如何でせう、明晩御出掛け下さいませんか。ごく略式に晚餐を差し上げたいと存じます——丁度、私共に倫敦の方が滞在して居られますから、御紹介いたしません。妻も奥さんにお目にかかりたいと日頃から申して居ります」

「フ」御好意ありがたう存じますが——」

ライオールは例のぶツきら棒な調子で何か斷りを言はうとするので、妻君のアミリヤは恐ろしい目付をして良人の顔をデロリと見た。どうかして男爵家と交際したいと思つてゐたところへ、男爵の方から交際を求めて來たのは、誠に願つたり叶つたり、此機會を逸しては大變と考へましたから、アミリヤは舞臺仕込みの特別上等の艶やかな笑みを浮べて、男爵に向ひ、

「ア」御好意に甘へまして参上いたします。もう、私には何よりの保養で御座います。御交際を願う方が、此邊には一向に御座いせんので、私田舎にはコリ／＼致して居ります。倫敦に居ります時分は、始終上流の方々に御交際を願つて居り

ましたので、急に此方へ参りますと、まことに淋しう御座いましたねえ。貴方、明晩は是非お邪魔をさせて戴きます。奥様も、それまでにはお頭痛がお癒りで御座いませう。どうかお癒り遊ばすようにと、蔭ながら祈つて居ります。あら、もうお立ちで御座いますか。宜しいでは御座いせんか。お茶でも召し上つて……」

フ「いや、有りがたう御座います。それでは明晩はお待ちしますから」

フ「エランド男爵は席を起つて歸りかけたが、ちよつと女關に立止つて、

フ「結構な御住居ですな。如何にも奥床しい」

褒めやうがないから、奥床しいとやりました。ライオールは相手の世辭を眞に受けて、

ラ「先祖が此處に住居を定めてましてから、四百年になりますからな」

フ「さうですか。實に羨望に堪へんです。私共のやうな成上り者は、先祖が何處に何うして住んでゐたか、それすらも分らない次第ですな。時に、御家族は、

奥さんと、それからお嬢さん、昨日夏の山でお目に懸つた彼の令嬢が、たしかお一人でしたな？ 今日はお見えにならないようですが、どちらかへ御出掛けになりましたか」

ラ「はア、娘は友達の家へ泊りに行きました」

フ「ああ、さうですか。それは残念です。明晩令嬢と御同伴下さるようにお願ひしたかつたのですが——」

ラ「娘は未だ交際社會へ出ませんから」

フ「さうですか。しかし、ほんの内輪同士の晩餐でありますから。いや、令嬢には、いづれ又た御出でを願はうと致しませう。失禮ですが、令嬢は好い御縁紙ですな。それに御活潑で、するとお子さんは、あの方がお一人で……」

ラ「一人ツ子です」

フ「さうですか。私共には一人も娘がありませんでな。妻がいつもそれを苦にし

て居ります。しかし、憚が一人居ります。オックスフォードからツイ此間歸つて参りました。たしか、お嬢さんにお目に懸つたとか申して居りましたが——」

「私は存じません」

「ああ、さうですか。それでは明晩の八時に、お待ちして居ります。さようなら」

フエランド男爵が歸つて行きますと、アミリヤは良人に向ひ、

「ねえ、貴郎。これは皆な私の爲めよ。男爵の招待は——フエランドさんは探りに入らしたんだわ。さうすると、私が、貴婦人だといふことが、直ぐ分つたもんで、向うから交際を求めなすつたのよ。ねえ、私、何を着て行きますか？ どうしたって、禮服でなけりやアねえ」

「ノラが見つからないよ。ネルズワージーへ行つて、方々尋ねたんだが」

「あら、まだ其様な事を氣にしてなさるの？ 大丈夫ですよ。何處かのお百姓の

ところへでも行つてゐるんでせう？ お百姓が好きだから。もうノラの事なんか心配しないことにしませうよ。氣が向けば歸つて來ますから。それよりも、明日の服装が大問題ですわ。紫のビロードの服ね、眞珠の附いた、あれにしませうか。それとも七珍のフロックにしませうか。私、出来るだけおめかしなけりやア、これも貴郎の爲めによ。あら、なぜ、そんなに沈んだ顔をしてなさるの？ よして頂戴。交際社會へ出て、皆なからチャホヤされようといふには、これが好い機會ぢありませんか。貴郎は服装はあつたね。燕尾服を持つてなさるでせう。型は少し古いけど、まあ可いわ。男は何うでも、女の方さへ際のない風をしてゐれば、世間は馬鹿にしやしないから」

アミリヤは既うノラの事なんか忘れて了つて、男爵の招待ばかり氣にしてゐる扱て翌日になりますと、アミリヤは湯に入るやら、お化粧をするやら、箆笥から着物を引張り出して鏡の前で着て見るやら、大騒ぎをして、約束の時刻に、やう

やくと男爵邸へ驅け着けました。無論、ライオールも牛に曳かれて善光寺の精で
いや／＼ながらお伴をした。

晚餐の模様を申上げると、長くなりますから、それは略しまして、一足とびに
食後の談話室に移ります。談話室に於きましては、例の人の悪いフロラ嬢、先刻
からアミリヤの様子をデロリ／＼と見て居りましたが、何と思つたか、他の客の
間を別けて、アミリヤの傍へにじり寄り、さん／＼水を向けた揚句に、

「奥さん、何かお聴かせ下さいました。吃度、奥さんは音楽がお上手でらつ
しやるんですわ。私、奥さんのお聲を聞いて、もうちやあんと分つたんですもの」
「い、え、駄目なんで御座いませんよ。でも、折角の御望みですから、それでは
一ツ歌はせて戴きませうか」

アミリヤは大得意になつて、ピアノのところへ行つて、彈きながら歌ひ出した
唄は「何とかの戀」といふ極めて浮々した調子の流行唄。昔取つた杵柄で、アミリ

ヤはなか／＼上手に歌つた。一座の中には、それを聴いて眉を擧めた婦人が二三
はありましたが、紳士連は悉く大喜び、唄が済むと拍手喝采が盛んに起りました
御亭主のライオールさんは鼻を高くして、ニヤリ／＼笑ひながら、アミリヤの傍
に立つてゐる。これだから妻君の尻に敷かれるのも無理はありません。

紳士連は寄席へでも行つたつもりで、アミリヤに「もツと歌へ」とせがむ。すつ
かり好い氣になりました、アミリヤは前の唄よりも一段と挑發的な奴を臆面もな
く歌ひました。

甲「いや、どこもお上手だ。こんな面白い唄は生れて始めて聴きましたよ」
乙「唄は斯ういふのに限りますなア」

丙「いくら節が面白く出来ても、唄ひ手が腕がなけりやア駄目だよ」

甲「奥さんは何處の音楽學校の御出身です？」

なんかんと、ひやかし半分に話しかける。しかし、ひやかされるとは知らない

から、アミリヤの得意は絶頂に達した。やがて一同に別れを告げて歸途に就きますと、アミリヤは馬車の中で、氣取つた手つきをして扇子を使ひながら、良人に向ひまして、

「ア」大成功でしたのね。だから、言はないこつちやないわ。今夜が新しい生活の振り出しで、これから私達は交際界の立物になるんですよ。貴郎！お禮の一つぐらゐ言つたつて可いでせう」

「うむ、お前の唄は何時聴いても好いね」

此調子だから天下泰平です。お話代つて、フエランド男爵は、ライオール夫妻を送り出し、七本目の葉巻を吸つてから、悠々と二階の奥さんの部屋へ上つて来た。御亭主の切り上げようが遅いので、奥さんは先刻からブリ／＼して居ります。夫人「やつと濟んだんですか、するぶん遅いちやありませんか。それに貴郎は、段々顔色が悪くなりますよ。あんまり不養生をなさるからです。夜ふかしをして

煙草とお酒ばかり召しあがるから、胃が悪くなるのも當り前です。今に取り返しのつかない事になりますよ。まア何だつて、あんな下等な女をお呼びになつたんです。又た何か思惑があるんぢやありませんか」

「さあ、どうかな。それはさうと、今夜は氣分は何うだ」

夫「私もう此様な生活は嫌になりました。早くクラバムの家へ歸りたう御座います。貴方が投機をお始めになるまでは、私達はクラバムで幸福に暮してたんですのに、——」

「クラバム?! 俺の今の地位を考へろ——」

夫「そりやア貴郎は立派な富豪でせう。だけどお金がいくら有つたつて、幸福ではありませんわ。それから、あのセルキン——あの子はちつとも私の俸のやうぢやありません。母親を馬鹿にして、私の言ふ事なんか、聴かうともしませんのよ大學なんかへ遣つたから、あんな人間になつたんです。それから、イリオットが

奉公人みたいに働いてるぢやありませんか——」

「『イリオツトの事なんか気にするな。あれはお前の知つた事ぢやない』

夫』それでは、今夜の女は？此の方は私も関係がありますよ。あれは寄席藝人か
なんかでせう？」

「『お前なんかは、あの女の事を氣にかけんでも可い。あの方も俺の商買上の仕事だ。さうでもなくって、俺が招待するかい。お前は機嫌よくして、彼女と交際してゐてくれりやア、それで可いんだ。一體、お前は今夜どうかしてゐるのか。俺はお前の欲しいといふものを、何でも買つてやるぢやないか。お前を立派な貴婦人にしてやつたぢやないか。お前は早く寝るが可い。俺には考があるんだから餘計な口出しをしなざるな』

フエランド男爵夫人は仕方なしに口を噤んで了ひました。フエランドの考へてゐる事といふのは、果して何でありませうか。

一〇、不思議な肖像畫

又たお話がノラに戻ります。

前々回に申上げました如く、ノラは畑の中に一軒の小舎を見付けて、その中へ這入つて行きましたが、少時して例の少年の服に着換へ、小舎を立ち出でましてそれから一時間ばかり歩いて、ボーラツシユの町へ着きました。町家はそろ／＼店を開けるところ。ノラはとある店の鏡の前に立つて、じつと自分の變つた姿に見入りました。令嬢ノラは何處かへ消え失せて、腕白小僧が鏡に映つてゐる。唯だ男の兒にしては頭髪が少しく長すぎます。これでは可けないと、ノラは又た一軒の店へ這入つて、小さな鏡を一挺買ひ求め、裏道から畑へ出て、美しい頭髪を惜氣もなく切つて了つた。これで變裝は出来ましたが、人が見て何う思ふだらう女といふことを見破られはしないかと、おづく／＼町を歩いて、とあるミルクホー

ルへ這入つて参りましたノラは、主婦に向ひまして、

「小母さん、牛乳とパンをくれないか」

生れて始めて男の声色を使うんですから、本人は胸をどきどきさせて居ります

が、ミルクホールの主婦さん、之がライオール家の令嬢とは気が付かない。

婦「太變早いね。これから船へ乗るのかい」

「ううむ、陸で働く口を探してるんだ」

婦「なか／＼口はないよ。まあ探して見なさるが可い。お前さん、これまで何んな仕事をして来たんだい」

「畑の仕事」

婦「此町ぢやア其様な仕事はありやしない。ネルスワージーの方へでも行つて見ちやア何う？」

ネルスワージーは鬼門です。ノラはそこ／＼に店を飛び出し、買つて来たパン

をむしや／＼やりながら、路傍の石に腰をおろして、今夜は何處で明かさうかと
思案に暮れて居りますと、町の方から一臺の二輪馬車がやつて来た。年とつた一
人の婦人が、片手に小馬の手綱を執り、片手に何かの本を開いて、乗つて居りま
す。餘程本の好きな婦人と見えまして、馬が何う走らうが、そんな事にはお構ひ
なく、脇目も振らずに読み耽つてゐる。その足許には買物を入れたらしいバスケ
ットが置いてある。馬車の後からスパニエル種の大きな犬が跟いて來ます。

その中にノラの前まで來ると、馬が何かにつまづいたので、件の老婦人はびく
ツとして、本を傍へ落とし、慌てて手綱を握りましたが、其途端にバスケットを蹴
飛ばして、中味を往來へさらけ出した。それを見たノラは、飛んで行つて、バス
ケットを拾ひ上げ、其處らへんに落ちてゐたものを其中へ入れて、馬車へ載せて
やりました。

老「おや、お前は何處から飛び出したんだえ？」

「僕は路傍に休んでゐたんです」

老「だが、何だつてジャツキーを驚かすんだね」

「僕が驚かしたんぢやありません。其馬が獨りで蹴躓いたんです」

老「馬鹿な事をお言ひ！此馬は今までに躓いたことなんかありやアしない。お前を見て驚いたにきまつてる。だが、お前は此様な處で何をしてゐたんだね。何處へ行くんだね」

「何處へも行く處がありません。僕は口を捜してゐるんです」

老「路傍に口があるかね。……ありがたうよ……私の本は何處だえ？」

「ノラは本を拾つて老婦人に手渡しました。」

老「お前には私の読みさしの場所が分るまいね。男の兒は氣が利かないから、分りつこはない。お前は何ういふ口を捜してゐるの？」

「何でも可いんです」

老「何でも可いツて？そんなグラ／＼した考へでは駄目だよ。お前此路を行くのえ？さうかい。そんなら此處へ乗つて、馱者になつておくれ。ジャツキーを驚かしちや可けないよ。大丈夫かえ？」

「大丈夫です」

ノラは馱者臺へ乗つて、手綱を執りました。老婦人は之れで安心と言つた風に反りかへつて、一心に本を読み始めた。少時行くと路が二つに岐れて居ります。

「何方へ行くんですか」

老婦人は顔が上げて、少時、二つの路を眺めてゐましたが、決心がついたと見えて、頭を右へ振つて、又た本を読み出した。その右の方の路は沼地の中を曲りくねつて、進めば進むほど段々と淋しい處へ這入つて行く。一體何處まで行けば此お婆さんの家があるのだらうと、ノラは不思議に考へて居りますと、その中行手の木の茂みの上に煙突が見えて來た。それから間もなく、古い鐵の門の前へ

出ました。這入つて可いか悪いか分りませんから、ノラは馬車を停めて躊躇して居ります。と、老婦人は本からイヤ／＼眼を離して、

老「なぜ這入つて行かないんだい？…おい、おい、ジャツキーに鞭を當てちやア可けないよ。暴れ出すからね。お前はチンメルマンの小説を読んだかえ？」

ノ「い、え、読みません」

老「男の兒はちツとも本を読まない。お前も本が嫌ひなんだね」

ラ「嫌ひといふ譯ぢやありませんが、僕は他にいろ／＼仕事がありましたから、本を読むことが出来なかつたんです」

老「男の兒は怠惰者だよ。私はよく知つてる。おや！お前の顔は何うしたんだい痣が出来てるね」

ノラは繼母に打擲されたことを今更の如く想ひ出して、思はず顔を赧らめました。

ノ「ちよツと怪我をしたんです」

老「嘘をおつきなさい。お前は喧嘩をしたんだらう。喧嘩の譯はよく分つてるよ

— 女の子の事からだらう？ —

ノ「い、え、さうぢたありません」

老「そんなら結構だが——私は女の子は大嫌ひ。女の子ほど、うるさくつて、役に立たないものはありません。家には女の子は一人も置かないよ。私は遠くの昔に愛想をつかしたよ」

ノ「僕も女の子には用がありません」

用のないに極まつてる。もど／＼女の子ですから。しかし、老婦人は何處までも男の子と思ひ込んでゐる。

老「お前はなか／＼氣の利いた若者らしい」

こんな話をしながら、やつて参りますと、半ば農家風の別荘が見えて來た。そ

の女關のところ、馬車が停りますと、奥から一人の老爺が出て来て、ノラの手から手網を受取つて、その顔を凝視して居ります。尤も老婦人の氣まぐれを知つてゐると見えまして、別段驚いた様子はない。

爺「お歸りなさいまし」

老「男の子を一人連れて来たよ。ジャコブ。此子は女の子が嫌ひださうだから、その方では心配もなからう。なか／＼氣が利いてるよ」

ジ「名前は何と言ふんで御座います」

老「何だつけね。忘れたよ。お前は何といふ名前だつけね」

ノ「シリル、マートンと言ふんです」

何かの本で見たことのある名前を想ひ出して斯う答へました。老婦人は此名前が氣に入らないらしい。

老「いやな名前だね。だが仕方がない。ジャコブ。此子に向ふへ連れてツて、仕

込んでおくれ。ちよツと、お待ち！お前は煙草を喫むかえ？」

ノ「喫みません」

老「それは何よりだ。ねえ、ジャコブ」

老婦人は斯う言ひ捨て、奥へ這入つた。と、老爺はノラを厩へ連れて行きます

ジ「馬具の取りはづしが出来るかの」

ノ「出来ます」

ジ「どれ、やつて御覽」

黙つてノラのするのを視て居りましたが、

ジ「うむ、そのくらゐに出来れば上等の部だ。さあ、井戸で手を洗つて、家へお這入り。お午餐の仕度の仕方をお前に教へてやる。お主人がお前を仕込めとおつしやつたから、これから俺が仕込んでやるぞ」

それからジャコブはノラに手傳はせて、食事の仕度を致し、主人に斯くと告げましたから老婦人は食堂へ姿を現した。ところが、此の御隠居はよッほど忘れッぽい性質と見えて、少時、珍しさうにノラの顔を眺めて居りましたが、やつと想ひ出して、

老「ああ、さうくお前は變挺な名前の子だつね」

持つてゐた本をテーブルの上へ置いて、それを讀みながら食事を始めた。するとジャコブが萬事心得たといふやうな風をして、主人の傍へ行つて、本を取上げさつさと食堂を出て、飽氣に取られてゐるノラを手招きました。

ジ「何を吃驚したんだ。お前は冷たい肉を食べるだらうな。家では大抵冷たい肉を食べるだらうな。家では大抵冷たい食物で済ますんだよ。手が省けるからの」

ノ「お爺さんの他に誰も働く人はゐないんですか」

ジ「ゐないよ。いや、今日からはお前がゐる。女中は一人もゐるやしない。御主人

が女の子が大嫌ひだからな。さう言へば、俺も大嫌ひだ。なあに、女なんかゐないでも、家の中は此通りキッチンとしてらあ」

ちつともキッチンとしてゐるやしない。臺所の汚い事はお話になりません。ノラは元來綺麗好きですから、ジャコブが向ふへ行つた後で、大掃除に取りかかり、夕方までには見ちがへるやうに綺麗にしてつた。

晩の食事を済むと、ジャコブはノラを厩の上の寢部屋へ連れて行きました。

「汚い部屋だこと！それでも、今夜はゆると寝られるから、安心だわ」とノラは心の中で考へた。ジャコブ爺さんは晩食を腹一ぱい詰め込んだので、御機嫌が好い。

ジ「お前も草臥れたらうから、もう寝るが可い。これがお前の部屋だぞ」

ノ「お爺さん、おやすみなさい」

總て老爺が去つて了うと、ノラは堅いベットの土へ疲れた體を横へました。と、

が女の子が大嫌ひだからな。さう言へば、俺も大嫌ひだ。なあに、女なんかゐないでも、家の中は此通りキッチンとしてらあ」

ちつともキッチンとしてゐるやしない。臺所の汚い事はお話になりません。ノラは元來綺麗好きですから、ジャコブが向ふへ行つた後で、大掃除に取りかかり、夕

方までには見ちがへるやうに綺麗にしてつた。

晩の食事を済むと、ジャコブはノラを厩の上の寢部屋へ連れて行きました。

「汚い部屋だこと！それでも、今夜はゆると寝られるから、安心だわ」とノラは心の中で考へた。ジャコブ爺さんは晩食を腹一ぱい詰め込んだので、御機嫌が好い。

ジ「お前も草臥れたらうから、もう寝るが可い。これがお前の部屋だぞ」

ノ「お爺さん、おやすみなさい」

總て老爺が去つて了うと、ノラは堅いベットの土へ疲れた體を横へました。と、

彼女の心は何時しか飛んで父の家へ、イリオット、グレアムの傍へ歸りました。
 『今頃イリオットさんは、私の事を何う思つてゐなさるかしら』と考へながら、
 ノラは懶けに眼をつぶりました。

ノラは世間普通の若い娘のやうに、情の世界に人と成つたのではありません。
 従つてイリオットの熱烈な戀に酬いだけの用意がない。しかし、その心の奥底
 には、青年に對する思慕の情が宿つて居つた。で、その晩彼女は夢にイリオット
 の聲を聞きイリオットの熱い接吻を吾が唇に感じたのであります。

翌朝、ノラは早く目を覺した。麗かな陽が窓から射して、何とも言へない好い
 氣持ちです。ノラは直ぐ起床して、戶外へ出ましたが、四邊には誰もゐない。そ
 こで小馬のジャッキーに飼糧をやつて、それからブラリ／＼と家の周圍を歩いて
 見た。人家と言つては他には一軒もない。所謂野中の一軒家で、庭は可なりに廣
 いが、長らく手入れをしないと見えて、草が生え放題に生えてゐる。庭の向ふに

ちよつとした菜園と牧場があつて、二頭の牝牛が悠々と草を食べて居りました。
 それを見るとノラは何となく懐かしくなつて、いきなり其の傍へ先り寄つた。

『牛小舎へ追ひ込んで、乳を搾つてやらうかしら』
 などと考へながら、頻りと牝牛を見て居りますと、お爺さんのジャコブが起き
 て来て、

『其處で何をしてるのだよ。御主人様のところへお湯を持って行くんだ』

ジャコブはノラを家の中へ呼び入れ、階段の下まで連れて行つて、老婦人の部
 屋を教へました。

ノラは二階へ上つた。見ると、道具などもなかく、素晴らしいものが置いてある
 壁には立派な油繪が幾つか掛けてある。『爺やさんは御主人の事をデボラさんと言
 つてたけれど、一體御主人といふのは何ういふ人なんだらう』そんな事を考へな
 がらノラは老婦人の部屋の扉を叩いて、床の上へ湯の瓶を置き、それから油繪を

ノラは二階へ上つた。見ると、道具などもなかく、素晴らしいものが置いてある
 壁には立派な油繪が幾つか掛けてある。『爺やさんは御主人の事をデボラさんと言
 つてたけれど、一體御主人といふのは何ういふ人なんだらう』そんな事を考へな
 がらノラは老婦人の部屋の扉を叩いて、床の上へ湯の瓶を置き、それから油繪を

一つ一つ見て歩いた。中には新しいのもありましたが、大抵は極く古い。それを段々と見て行つて、或る肖像畫の前まで来ると、ノラはぎよつとして急に立止りました。

といふのは、其肖像畫に描いてある紳士の顔がイリオット、グレアムに生寫し眼の色といひ、頭髮の縮れ方といひ、無邪氣な表情といひ、何處から何處まで、寸分違ひはない。ノラは人里離れた此の隠れ家に圖らずも不思議な肖像畫を發見いたしましたと、まざくといリオットの姿を想ひ浮べて、茫然とイんで居りました。「おい、其様な處に晩まで立つてる氣か」

ジャコブが階下から呼ばはつたので、ノラは始めて我に歸り、名残惜しげに肖像畫を眺めながら階段を下りて行きました。

一一、凶 報

扱て、ライオール夫人アミリヤは、男爵邸へ招待されて、大に面目を施しました——いや、面目を施したと御本人は考へました。そこで今度は其返禮の意味で男爵夫妻を招待しなければならぬ。が、自惚心は強くつても、もとく馬鹿な女ではありませんから、男爵夫妻を自分の家へ招待する譯には行かない、ぐらゐは心得て居る。どうしたら可からうかと、いろく思案をめぐらした結果、野遊びといふ名案を思ひ付きました。

「ねえ、貴郎お酒を充分に備へることが肝腎ですよ。お酒はシャンペンに限ります。シャンペンがあれば、他のものは何うでも構ひません。男は飲むものさへ充分なら、食べるものは何でも可いんですわ。それから男子連が満足すれば、女の方も満足します。一つネルスワージーへ使をやつて、シャンペンを一箱取り寄せませう。それからマルサがバイでも拵へればそれで澤山です。それではフェランドの奥さんへ手紙を上げて、皆なに木曜に来て下さるやうにお願いしませう。」

場所はその川の水が瀧のやうに落ちてゐる處ね、あの傍が可いぢやありませんか」
 ラ「うむ、それも可からう」

ライオールは餘り氣乗りが致しません。どんな無情な親でも、一人娘が家出をして行方が知れなければ、平氣でゐられるものではない。で、ライオールには、ノラの長年の心盡しが分りませんでした。それでもノラがゐなくなると、良心の不安を感じずにはゐられなかつた。それから、ノラの家出の一件が世間の噂に上りはしないかと、それが非常に心配になつて來た。ですから、野遊びの相談に餘り氣乗りがしないのです。ところが、アミリヤの方はフェランド男爵家との交際に夢中になつて、ノラの事なんか、とツクに忘れてゐます。

アミリヤは野遊びの計畫を自分獨りで決めて了つて、早速フェランド夫人へ手紙を出しました。次の木曜日の何時に、斯くかくの場所で野遊び會を催しますから、御一同お揃ひで御出掛け下さいといふ文面、之を讀んで男爵夫人は少なから

ず氣色を損じた。

夫「あの女が野遊び會に來てくれといふんですよ。他に約束があるからツて断つてやりませう」

鏡の前で禮服のネクタイと取組み合ひをしてゐた男爵は、之を聞くと夫人に向ひまして、

男「そんな事をしては可けない。御招待に應じて出掛けますと、返事を書きなさい」

夫「なぜ、此様な招待に應じなければならぬんでんの？あの人の御亭主は家柄かも知れませんが、あの人は淑女ぢやありません。私達と對等に交際する資格がありません。私、あの女の素性からして、怪しいと思ひます。あの白粉の附け方を御覽なさい。どうしたつて素人ぢやありません。何誰でしたか、彼女が寄席へ出てゐるのを見たと言つてなさいましたよ。皆さんは面と向つてはお世辭をお

ッしやるけれど、蔭では馬鹿にしてるなさいます」

男「そんなでは困るね。吾々が交際して可い婦人なら、彼連中が交際しても可い筈だ。例へ誰でも俺の友達を馬鹿にするといふ法があるか。彼奴等は人の家へ来て飲んだり食つたり、好きな真似をしてるぢやないか。他人の事よりも少しは自分の作法に氣を付けるが可からう。これ、ベツチー。よく俺の言ふことを聞きなさい。俺はライオール夫妻と親交を結び度いだから、お前も其積りで、俺の吩咐ける通りにしなさい。これまで俺のして来た事にソツがあるか」

フエランド男爵夫人はとうとう良人に説き伏せられて、アメリヤの招待に應じることになりました。

愈々其當日になりますと、野遊びには誂へ向きの上天氣、箱入のシャンペンも前の日に到着してゐる。パイも出来てゐる。此等の飲食物をネットが馬車に積んで、アメリヤの選定した場所へと運びました。刻限近くなると、男爵邸の連中が

キヤツ／＼と騒ぎながら乗り込んで参ります。さあ、かうなるとアメリヤ女史得意の壇場、男爵令息セルキン君の傍に陣取つて、大に主人振りを發揮する。

「どなたかピシヨン、パイを召しあがりませんか。フエランドの奥様、ハマでも差上げませうか。セルキンさん、三鞭をお抜き遊ばせ。皆さんお渴きですから」舞臺仕込の愛嬌を萬遍なく振りまきながら、時々は流行唄の一曲さを、好い聲で歌つて聞かせるので、男子連は大喜び、三鞭酒の酔の廻るにつれて、歌うは騒ぐは、中にも無遠慮な先生は、何處かの國の紳士のやうに、アメリヤを捕まへて、怪しからぬ戯談をする。そんな事には慣れきつてゐますから、アメリヤは一向驚かないが、御亭主のライオールこそ好い面の皮、にがりきつて後ろの方に控へてゐる。陽氣な一座の中に、今一人苦い顔をしてゐるのは、フエランド男爵夫人。「あんな下等な女に交際を求めるフエランドの氣が知れない。これには屹度曰くがあるのだらう。又た何か不正な事を企んでゐるのではあるまいか」

と、一人で胸を痛めて居ります。

その中に酒も残り少なになつて來ると、若い連中が盲目鬼をやらうと言ひ出した。それは面白からうと、年寄連も即座に賛成する。そこで、發案者が一番に目かくしをして鬼になつた。追つかける。逃ける、轉ける、笑ふ。ぶつつかる、つまづく。いやもう言語道斷の亂ちき騒ぎ、なかにもアミリヤは、すっかり若い娘の氣分になつて、一番活潑に跳ね廻りました。

扱、茲に憐れを止めましたのは、青年イリオットグレーム、此數日は絶えてノラの顔を見る折がありませんので、仕事をする元氣もなく、今日もぶらりくくとノラを捜しながらやつて參りますと、此騒ぎです。自分とノラの淨かなる戀の紀念の場所を賣されたやうに感じて、イリオットの胸中には憤慨の情がむらくと湧いて來た。此處な場所へ來てダラシなく騒ぐ奴は何者であらうと、腹立たしけに山路を驅け下り、川の曲り目について曲ると、亂チキ騒ぎの現場へ出ました。

その時は別のフロラ嬢が鬼になつて、他の連中がフロラを取巻き、踏んだり蹴つたりしながら、鬼をからかつてゐるところ。イリオットはあきれかへつて、とある岩の蔭から此光景を眺めて居りました。と、フロラがいきなり其岩の方向へ勢よく驅け出した。危機一髪！此勢で岩にぶつつかつたら、何んな大怪我をしたかも知れません。イリオットは斯くと見るより、岩蔭から飛び出して、しつかりとフロラの體を抱き留めた。笑ひざはめいてゐた連中がびつたりと鳴りを鎮めたフロラは一種名狀しがたい戦慄を覺えて、手をあけて眼かくしを取り除けると、自分の前にイリオットが立つてゐる。

『ああ、危なかつた！もう少して大怪我をすればころだつたわ！有りがたう！』

イリオットは挨拶して立ち去らうとした。すると、セルキンが、

『おい、グレーム、丁度好い所へ來た』それから傍のアミリヤに向ひまして、

「奥さん、これを片付けるんでせう？ 書生が来ましたから、彼にやらせませう」
 フェランド男爵が恐ろしい顔付をして、何か言はうとすると、アミリヤが口を
 出した。

「ア」あら、セルキンさんは好くお氣がつかますこと！あの、書生さん、此方へ來
 て頂戴！」

イリオットは一寸躊躇しましたが、怒つて見ても始まらないと考へましたが、
 アミリヤの命ずるままに、空嚙やバスケットを片付け始めた。連中は息せき切つ
 てシヤンパンの箱の周圍へ集まつて來る。するとフロラが傍のアミリヤに向ひま
 して、

「フ」今日はほんとに面白く遊びました」

「ア」さう言つて下さると、私嬉しう御座います。お蔭さまで私も面白う御座いま
 した。近い中に又た致さうぢやありませんか。戸外の空氣は宜しう御座いますね。」

「フ」ええ、體には一番可う御座います。此次には、奥さん、是非お嬢さんを連れ
 て被入つしやいまし。お嬢さんは未だ當分はお歸りにならないんですか」

「ア」え、當分向ふに居るだらうと存じます」

「フ」面白くつて、お歸りになれないんでせう。何方へお出掛けになりましたの？」

「ア」ミリヤは一寸返事に困りましたが、直ぐと口から出任せに、

「ア」倫敦へ参りました。主人のお友達のお宅に泊つて居ります。ええ、屹度面白
 おかしく暮してゐるんで御座いませうよ」

「フ」それは田舎よりか好い口がありますからね、ほ、ほ」

「ア」ミリヤは、「これは好い事を言つてくれた」と思ひまして、

「ア」え、其事なんですのよ。まだ今の所では決つたといふ譯ではないんですけ
 れど、主人もどうかうまい具合に決つてくれれば可いがと申して居ります。です
 から、まあ、本人の心まかせに逗留させておかうと存じますの」

「さうですとも、奥さん、こんな事は急いたつて駄目ですわ」

二人の話の様子では、ノラは縁談の爲めに倫敦へ行つてゐるらしい。此話を傍で聞いて居りましたイリオットは、急に顔色が蒼くなつて、バスケットの蓋をすゝ手がぶる／＼顛へました。

「片附けものは之れだけですか？」

「え、それだけ、どうも有りがたう」とイリオットに答へまして、それからフロラに向ひ、小さな聲で、「心附けの一シリングも遣りませうか？」

「およしなさい！」

すつかりボーイ扱ひにされちまつた。イリオットはぼんやりと四邊を見廻してそれから大股に此場を立ち去りました。

一二、新しい世界

ノラが老婦人デボラ、レールトンの隠栖に寄食することになつてから、彼れ一ヶ月経ちました。繼母に打擲された顔の痣も既うとツクに消え、心の傷手も大分は癒えたのであります。生れつき氣立ての優しいノラの事でありましたから、風につけ雨につけ、父の身の上を案じまして、近頃では折々家出を後悔するやうになつて來た。ところが、或日の事デボラ女史が町へ買物に出掛けた序でに、地方の新聞紙を一枚買つて歸つた。此新聞にはフェランド男爵邸の晩餐會の事が委しく書いてありましたが、ノラは其記事を讀んで、憤怒と屈辱を感ぜずにはゐられなかつた。

「お父さまは自分の事を心配しては被居しやらない。お父さまの愛情はアミリヤに傾いて了つた。自分は既う死なうが生きようが、お父さまにはどうでも可いのだ」かう考へると、ノラは止めどもなくあふれ出る涙を拂つて、断然父の家に歸るまいと決心しました。

父親に見捨てられたと知つて、ノラはどんなにか悲しみましたらう。どんなにか無念でしたらう。此の悲しみと無念さへなかつたら、ノラの近頃の生活はさう不幸なものではありませんでした。主人のデボラ女史は朝から晩まで一室に閉ぢ籠つて書物ばかり讀んで居りますから、少しも世話がやけない。それにデボラはノラが甲斐々々しく働くので、非常に氣に入つたらしく、近頃では食事の世話や部屋掃除を大抵ノラにやらせるやうになつた。

仕事の暇々にノラは、附近の山野を跋涉して、時折は近在の人々に逢ふこともあつた。デボラ女史が非常な金満家であるといふことも、此等の人々の噂に聞いたのであります。

或夕方、ノラが食堂へ這入つて行きますと、デボラ女史が古風な箱を開けて何か捜してゐる様子。箱の中には澤山の寶石がびか／＼光つてゐる。ノラはそれを見て思はず驚嘆の目を睜りました。

と、老婦人は振りかへつて、

「ア、シリル、お前は斯ういふものを見たいのかえ。此方へ来て御覽。まさか女の子みだに欲しがりもしまい。男の子にはダイヤも石塊も同様だからね」

ノ「まあ、綺麗なこと！」

「綺麗だらう？ 私も斯ういふものを身につけたことがあるのさ。それはもう古い昔の話だよ。ああ、可いとも。手に取つて御覽。見るのは可いが、なくしちや困るよ。大層金目のかかつたものなんだからね」

少年に化けては居りますが、かういふものを見せられると自づと娘らしい興味が起つて来る。ノラは目を圓くして、一つ一つ手に取つて見て居りましたが、そのうちにダイヤをちりばめた豆寫眞入れを見つけた。何の氣なしにそれを見ますると、二階にある肖像畫の縮寫のやうなものが這入つてゐて、其顔はイリオット

グレアムに非常によく似てゐます。ノラは不思議に思つて、老婦人に向ひ、

「此方の肖像が二階にもありますね。好い顔ですね」

「其人は世界第一の美男子だよ。男の中で一番立派な一番氣高い、一番不幸な」

「何とおつしやる方ですか？」

「お前も女の子のやうに、根ほり葉ほり聞きたがるんだね。男の子は下らない事を訊くもんじゃないよ。さあ、此箱を二階の部屋へ持つてツて、それから自分の仕事をおし」

其日は何事もありませんでした。翌日ノラが庭の草むしりをして居りますと一臺の馬車が勢よく門内へ這入つて来た。誰かと思つて顔を上げると、豫て見知つてゐるトラニオン辯護士ですから、驚くまいことか、ノラは手に持つてゐた道具を抛り出して、慌てて自分の部屋へ駆け込み、辯護士の馬車の歸つて行くまで小さくなつて其處に隠れて居りました。其晩の事でもあります。デボラ女史は例に

依つて、お勤めのやうに食事をした、めて居りましたが、思ひ出したやうに、顔を上げて、

「デ」ジャコブ、お前は明日島へ行つておくれ。トラニオンさんが書類を持つて行くやうにとお言ひだから」

「シ」へえ」

と言つたきりで、ジャコブは嫌な顔をしてゐる。やがて老婦人が二階へ行つてしまひますと、ジャコブはノラに向ひまして、

「シ」嫌になつちまうな。俺がリヨーマチで困つてるのを知つてゐるくせに。トラニオンさんは事務員でもやれば可いに。なぜ俺を引張り出すんだ。そのくせ、ちやんと出張費を取るんだから甚いやね」

「シ」島つて何處です」

「シ」ノーナウエー島さ。彼處へ行きや、まるで島流しだ。あんな島は海の底へで

も沈んぢまやア可いんだ。御隠居の身代から言やア何でもないやアね」

ノ「すると、あの島は御隠居さんの所有なんですか」

ヅ「さうだよ。岩と石塊ばかりで、海鷗が飛んでる他にやあ、何にもるやしない」

ノ「だつて誰が住んでるでせう。さうでなけりやア、御隠居さんが書類を持つてけなんておツしやる筈がない」

ヅ「うむ、そりやア住んでる。畑の眞似事みたいなのが、少うしばかりと、それから石切場があるだ。なアに石切場たつて、ちツとも金になりやアしないのさ。彼處へ遣られて御覽、いつまで置かれるか知れやしない。第一途中の船の中がやりきれないよ」

此話を聞きますと、ノラの顔が急に輝いた。冒険好きなノラは、さういふ處へ行つて見たくつて仕様がなないのです。

ノ「僕が代りに行つちやア可けないんですか」

ジャコブ爺さんは目を圓くして、相手の顔を凝視しました。

ヅ「えッーお前行きたいか？うむお前なら途中の航海が面白いに違ひない。それになんだよ、ローノウエー島はな、それほど嫌な處でもない。男の子には持つて來いの遊び場所だ。用事を済ましたら、ゆつくり遊んで來るが可い。お前ならば俺が行つたも同然だ。可しく、今まで善く働いた褒美に、お前をやつてやらう」

ノ「御隠居さまに願ひして來ます」

ヅ「いや、いや、それは可けない。俺に任せなさい。俺から頼んで上げるからなお前は唯だ「はい」とか「いゝえ」とか言つてさへるれば、それで可いんだ」

ジャコブはノラを連れて、二階の主人の部屋へ這入つて行つた。

ヅ「ええ、御隠居様、シリルが明朝ローヤウエーへ參ることになつて居ります。今晚書類をお渡し下さいまし」

「お、シリルが行くか。さうかい。書類はあの筆筒の上にあるよ——ないか？それでは机の上にある——ない？それでは何處だらうね。ああ、さうく私はずっかり忘れてるた。懐に入れてたよ。そら、これだよ。シリル」

書類といふのは、ローナウエー島の借地人に對する立退請求書でありました。

「又た例の立退の請求だな。島の奴等は立退を食はされる迄は、地代を拂はないんだよ。これを持つてけば、拂うから心配はない、まあ、行つて見な。鷓鴣の卵を捜して歩くなア面白いぜ。その他いろいろ、楽しみがある。それぢやアな。明日の朝だから、今晚の中に仕度をして置くが可い」

かういふ譯でノラは愈々ローナウエー島へ出掛けることになり、翌朝の九時にポーラシユの波止場へ参りますと、船頭のマークス爺さんが船を仕立て、待つて居りました。

「お、今度はお主が行きやるかい。さあ此方々來て腰かけな。おツと、あぶな

いぞよ」

「船頭さん、どのくらゐで向うへ着くんだい？」

「それは風と潮の加減でな一概には言へんな。だが此のよな追風なら、物の五分も経たん中に、ローナウエーの浦へ這入れるやろな」

始めて船に乗つたノラは、最初少しく船暈を覺えましたが、例の氣丈な性質ですから、間もなく元氣を回復して、船頭の手傳ひをするやうになつた。マークス爺さんは之を見て悉く感嘆した。

「ほう！お主は船乗りに生れついとるぞ。此のハッピー、ルーシー丸で俺が一週間も仕込んで進ぜたら、立派な船頭になれるよう。そのお主の頭の中には、ちやんと船頭の型が備はつとる。お主は何か船乗り衆の家に生れ落ちたかな」

「い、え」

「さうなら濱の衆やな」

ノ「ああ」

マ「お主が船乗りにならうちう氣を起さしたら、いつなとボーラツシユの波止場へ來さしてな、船頭のマルクス爺さんと言つて、尋ねさしたら、直き分るからな」
船頭は湯を沸して茶を入れるやら、ビスケットとチースを出して、侷めるやらいろくくと親切にノラをもてなした。相性とでも言ひますか、二人は一寸の間に非常な仲好しになりました。で、船が島へ着いて、愈々別れなければならぬとなると、船頭は毛むくじやらの大きな手でノラの可愛らしい手を堅く握りしめまして、

マ「それなら暫くのお別れや。氣をつけさせよ。崖やからな、轉んで怪我などすると大事ぞよ」

ノ「船さん。さようなら、もう歸るの？」

マ「あ、戻る又た直き來るぞよ」

ノ「さようなら！」

マ「氣をつけさせよ。可いかな」

ノラは「さようなら」を五六遍繰返して別れを惜み、上陸してからも險しい阪道を登りながら、何遍か振りかへつて手を振つた。船頭のマークスも手を振つてそれに答へた。

阪道を登り詰めると、下の方に一軒の百姓家が見えたので、ノラはそれを指して進んで行きました。惣て門の前へ辿り着くと、一人の小娘が牛乳の罐を小脇に抱えて出て來ました。日よけ帽子の下から房々した髪を見せた愛くるしい娘。心持ち顔を根めながら、新來の客を不思議さうに見詰めてゐる。ノラは男のやうに帽子を脱つて、

ノ「ホツジさんのお宅は此處ですか」
娘は黙つて頷く。

「家におるのですか。お目に懸れませうか」

「父やんが彼處に戻つて來やした。こつちやへお這入りなんし」

ノラは娘に案内されて茶の間へ通つて、暖爐の傍の椅子に腰かけた。七月と言つても島は氣候が寒いので、珍客には火が第一の御馳走としてある。娘は一言も口を利かずに、長いテーブルの端の方へ布片を敷いて茶道具を並べ始める。丁度其時に娘の父親が歸つて來ました。すんぐりした體格の頑丈らしい男、如何にものんびりとした苦勞のなさ相な顔付をして居ります。

「私はデボラ、レールトンの使ひです」とノラは持つて來た立退請求書をホツジに手渡しました。ホツジは笑ひながら、それを受取りまして、

ホ「御苦勞様でやしたのう。私がホツジと申しやす。もう大方立退の請求書が來る時分やと思ふとりやした。今度は前の節季よかちつと遅れやしたなア。御隠居さんもトラニヨンさんも、他に大事な用があつたで、お忘れなされたやろ。かう

つと、期限は此月の二十五日やつたかな。俺は此様な事はとんと氣に懸けいで居るもんやでな。まあ、どうでも好いわ。お主は此島に逗留なさるやろな……俺らが家には客人が減多に見えいでな。偶さが訪ねて來てくれやすと、きつう嬉しうてならん。このよな離れ島へはるく來さつしやるのやからに。のうマーゲリ」

娘は顔を赧くして黙つて暖爐の方へ向いた。

ホ「デボラさんは相變らずお達者やろな。ほう！俺はデボラさんが小け娘さんの頃から知つとる。月日の經つのは早いもんなア！マーゲリよ。早うお茶の仕度せい。何ぞ食べるものをな。客人は、おひもじかる」

ホツジが地代を滞らすのは貧乏の爲めではないらしかつた。といふのは、娘のマーゲリが次から次へといろ／＼な御馳走を運んで來る。主人のホツジはそれを片端から平らけながら、ノラにも侷めさうして頻りと内地の珍聞を訊ねる。新聞紙といふものが此島には減多に來ないので、ノラが話すことでも、ホツジ

には一々耳よりであります。

娘

ホ「ほう！さよかな！まさかに、さよな事はなかる！」とか何とか言ひながら、熱心にノラの話に耳を傾ける。娘のマーゲリは火の傍に坐を構へて、可愛らしい目を圓くして、ノラの顔を見詰めて居る。その中に話の種子もなくなる。

ホ「石切場のシャフレーにも、逢うてくれさせ。彼も内地の事聞きたがるやろ。石切場ちうて、直き此處から見えとる、夕飯前にちよと行て來さつせ」

ノ「夕食？もう今日は何にも食べられません」

ホ「戯談言ふとらしやる！お主はローナウエーを始めて來さしたで、お知りやらんが、此島ではな、日に何度食ふたて支へないのや。のう、マーゲリ。さうやらわりや、ちよつと此客人に連れだうてな、石切場のシャフレーがどこまで案内して上げんか」

ノ「私は獨りて行きます。案内は要りません」

マーゲリと一緒に行くのが嫌なので、ノラはホツジの親切に言つてくれるのを無理に断りまして、獨りで石切場のシャフレーを訪ね、立退の請求書を手渡してそれからぶらりと散歩を始めた。ジャコブ爺さんの話では、人間の住む場所ではないやうなことを言つて居りましたが、來て見るとなかく、好い。「かういふ閑静な場所で一生活したら、どんなにか好からう。ホツジもシャフレーも、なるたけ地代の拂ひを延ばしてくれ、ば可いが。」などと考へて居ります。

空には幾千といふ海鷗が迷へる靈魂のやうに叫びながら翔つてゐる。入江の水溜りには星がチラホラと映る。ノラは唯一人新しい異つた世界へ來てゐるやうに感じた。過去の生涯を海の彼方へ捨てて來たやうに感じた。その翌朝宿の小さな寢臺の上に目を覺した時、彼女は最早ノラ、ライオールといふ娘ではなく、少年シリアル、マートンでありました。

其日は申分のない好天氣。ラブラドルから真直ぐに吹いて來る軟かな風がそよ

くくと面に當る心持は何とも言へない。ノラは近頃のない精神の爽快を覺えましたが、唯だ困つたのは、宿の娘マーゲリの素振りです。此娘はノラの傍へつきつきりに附いてゐて親切に世話をする。ノラが話をする時、一心に其顔を見詰めたが、耳を傾ける。そのくせ自分が話しかけられると、顔を眞赤にして俯向いてしまふ。ノラが男でありましたら、此可憐な娘の親切を何んなにか嬉しく思つたでせう。赧い顔をして俯向くのをいぢらしく、思つたでせう。が、何分此方が娘でありますから、所謂同性反撥の原則によりまして、段々とマーゲリの心盡しが五月蠅くなつて來た。ですから、ノラは成るだけマーゲリを避けるやうにして、大抵は獨りで島中を歩き廻りました。

ノラの一番氣に入つたのは石切場でありました。此石切場を借りてゐるシャフレーといふ男は、いやにしんねりむツつりした、憂鬱さうな人物でありましたがノラの方から元氣よく無邪氣に持ちかけるので、二人は間もなく仲好しになつた。

ノラは屢々シャフレーの仕事をするところへ出掛けて、世間話に一日を暮しました。

斯うして、別段のお話もなく幾日か経ちましたが、ホツジもシャフレーも地代を拂ひさうな素振りすら見せません。それでゐて、ノラを邪魔者扱ひにはしないけれど、どこか、兩人とも日を経る毎に益々ノラを大事にする。此案排では當分は島に滞在しなければなるまい。結局其方が仕合せだと、かう考へまして、ノラは退屈凌ぎに海鳥の卵の採集を思ひ付きました。皆さんも御存知の通り、海鳥の巢といふ奴は、大抵海を見おろす險阻な崖にありまして、容易には接近することが出來ません。で、ノラも最初のうちは、なか／＼思ふやうに採集が出來ませんでした。だが、元來が冒險心に富んだ大膽な娘でありますので、二三日後には險阻な路を平氣で上り下りが出来るやうになりました。

或日の事、ノラは険しい崖の鼻に立つて頻りと海鳥の巢を捜して居りますと、

順風に帆を揚げたハッピー、ルーシー丸が勢よく入江に向つて駛つて來るのが見えた。此方は小さな體をびつたりと崖にくっつけてゐるのですから、船から見える筈がない。一ツ船頭のマルクス爺さんと呼んで驚かしてやれと、口を開いて聲を出さうとしましたが、その時、船の中に一人の乗客がゐるのに気が付いた。しかしそれが誰だか見別けのつかないうちに、船は見えなくなつて了つたので、ノラは崖を攀ぢ登つて、坂道を船着場を指して歩き出した。丁度、ハッピー、ルーシー丸が棧橋へ横着けにならうとするところ。そこでノラは歩調を早めて、颯足に移つた。しかし二三間も走らないのに突然立止まりました。見てゐるとノラの顔は上氣して颯ツと赧くなり、それから急に眞青になつた。

船の中には乗客と覺しい人物が、島の方へ顔を向けて直立して居りました。急に喉の詰まるやうな氣がして、ノラは地面へ蹲り、少時苦しさに喘いで居りましたが、いきなり起ち上つたかと思ふと、反對の方角へ一目算に逃げ出した

ハッピー、ルーシー丸の乗客は果して何人でありませうか。

一三、大事な體

お話が前後致しますが、アミリヤ夫人の野遊び會の後片付けをして、聞らずも戀人の消息を小耳に挾んだイリオット青年は、無我夢中に山阪を駆け登つて、伯爵の所有地へ戻つて參りました。イリオットはアミリヤの言葉を疑ふ氣にはなれない。「なるほど、さう言はれて見ると、あの時のノラの様子が變だつた。あの時ノラは逃げるやうにして歸つて行つたぢやないか。ノラにはもう結婚の約束があつたのだが、それを口に出して言ふ丈けの勇氣がなかつたに相違ない。いや、勇氣のあるなしよりも、此自分を氣の毒に思つて、それを祕密にしてゐたのかも知ない。ああ、さうだ。これで何も彼も分つた。

イリオットは立止つて、絶望の眼を以て四邊を見廻しました。それは何といふ

荒れ果てた淋しい土地でありましたらう。今まではノラといふものがあつた爲めに、此片田舎も地上の樂園のやうに思はれましたが、ノラがゐるなければ、到底半日だつて此様な土地にゐられるもんぢやアない。いつもなら少しぐらゐる氣がくさくさしても、自分の小舎へ歸つて馬を見てゐると、氣が紛れるのであるますが、今は其様な事では胸中の煩悶は癒えません。

丁度、男爵所有の馬の内、三頭だけ倫敦へ賣りに出る事になつてゐましたのでイリオットは自分に此用件を帯びて倫敦へ出掛けやうと決心した。馬の方の事は一切自分に任されてゐるから、別段男爵の許しを乞ふには及ばなかつた。

輾轉反側の裡に一夜を明かしましてイリオットは翌日馬を倫敦へ送り届け、それから何處かに宿を取らうと思つて、街をさまよつて居りますと、不意に後から袖を引くものがある。吃驚して振りかへつて見ますと、いつぞや夕食を共にしたストライブラーです。

「ス」どうして、此地へお出掛けになりました。どうも善く似た方とは思ひましたが、まさか貴方とは思ひませんから、暫く躊躇してゐたんですが、やッぱりグレアムさんでしたか。どういふ御用事で出てゐらしたんです」

「馬を賣りに來ました。今厩舎に入れて來たばかりです。下宿を捜さうと思つてぶら／＼歩いてゐる所なんです」

「ス」ああ、さうですか。此處でお目に掛つたのは實に運が好かつた。私は今ランズヌースの家へ歸る所です。如何ですか、グレアムさん。むさくるしい處ですが貴方さへお差支なければ、私の家へお出で下さい。近所はなかく閑靜で好いですよ。青い畑なんかがありましたな」

「イ」ありがたう、それではお伴しませうか」

二人は辻馬車に飛び乗り、少時してランズヌースのストライブラーの住居に着きました。いそ／＼と立關へ迎へに出たのは、ストライブラーに何處か似たとこ

「ス」どうして、此地へお出掛けになりました。どうも善く似た方とは思ひましたが、まさか貴方とは思ひませんから、暫く躊躇してゐたんですが、やッぱりグレアムさんでしたか。どういふ御用事で出てゐらしたんです」

「馬を賣りに來ました。今厩舎に入れて來たばかりです。下宿を捜さうと思つてぶら／＼歩いてゐる所なんです」

「ス」ああ、さうですか。此處でお目に掛つたのは實に運が好かつた。私は今ランズヌースの家へ歸る所です。如何ですか、グレアムさん。むさくるしい處ですが貴方さへお差支なければ、私の家へお出で下さい。近所はなかく閑靜で好いですよ。青い畑なんかがありましたな」

「イ」ありがたう、それではお伴しませうか」

二人は辻馬車に飛び乗り、少時してランズヌースのストライブラーの住居に着きました。いそ／＼と立關へ迎へに出たのは、ストライブラーに何處か似たとこ

ろのある老婦人、果してこれはストライブリーの祖母でありました。

ス「お祖母さん、この方が何時かお話ししたグレアムさんです。さあ、グレアムさん。さたない家ですが、這入つて下さい。これでも浴室はありますよ。お祖母さん、お茶の仕度をして下さい。何か好味しいものがありますか。かういふ不便の場所ですから、迎もグレアムさんのお宅のやうな御馳走は出来ませんが……さう言へば、あの時のピフテキは結構でしたな。とにかく風呂にお這入り下さい。その中に仕度が出来ますから」

下へも置かない接待振です。イリオットは非常に其好意を喜びまして、早速風呂に這入りそれから茶を飲みながら、四方八方の話をして居るうちに、夕食の時刻となる。

總て食事が済んで祖母さんが引込んで了ひますと、ストライブリーはイリオットに向ひまして、

ス「實はグレアムさん、私はフェランド男爵に頼まれて、今日では男爵の秘書をして居りますが、どうも男爵の人物は今だに分りませんよ。人物が大いといふんでせうな。どんな大きな問題でも、男爵には大きすぎるといふことはありませんし、又た何んな小さな事でも、小さ過ぎるといふことがない。倫敦でも男爵くらの人物は澤山はありますまいな」

イ「さうですかね」

ス「貴方は毎日男爵に接近しておるでだから、お分りでせう。しかし男爵の人物論は何うでも可いとして、先刻濠洲の話が出ましたが……」

イ「さうでしたかね。ツイ迂濶りしてゐましたもんで……」

ス「濠洲に對しては、私は大なる興味を持つて居るのです。いつぞや、貴方に御馳走になつた折にも申上げましたが、濠洲といふ國は、誠に素晴らしい國です。さういへば、今日私は事務所へ出て、濠洲に關係の仕事をして居りました。何だか

貴方のお名前があつたやうに思ひます。貴方は濠洲のチャーリー、ホローといふ土地に何か御關係がありますか」

かう言はれて、イリオットはさつと顔を赧らめ、急に目を瞠つて、相手の顔を眺めました。

「え、それは父の住つてゐた場所です。父は其處で牧畜をやつて居りました。父が財産をなくしたのも其處です。或年大旱魃がありまして父の飼つてゐた羊が何千匹も一時に倒れたので、それから父は非常な窮境に陥りました」

「おや！おや！さうでしたか。それで御親父は何うなりました」

「もう少して身代限りになるところでしたが、フエランド男爵のお蔭で名譽だけは汚さずに済みました」

「流石は男爵ですな。男爵は友情に厚い方です。で？男爵が御親父の爲めに何ういふ事をしましたか？こんな事をお訊ねして失禮ですが、私は男爵の善行を聞

くのを楽しみにして居りますのでな」

「父の債務を引受けて、借金を拂つてくれました。其頃父は病氣でありましたそれから間もなく父はいろ／＼の心配事の爲めに、とう／＼なくなりました」

「それは／＼！貴方も嘸か力落しでしたらうな。御同情申上げます。それでその御親父の御所有地は何うなりました」

「どうなつたか知りません。男爵が債務と一緒に引受けたんでせう」

「さうでせうな！男爵なら引受けるでせう。それで男爵と御親父との間には、何か契約書といふやうなものが——いや、お話があんまり——その、なんです。

お話によると、男爵の義侠心が躍如として居りますので、つい色々な事を伺ひたくなるのですが——何ですか、御親父は契約書のやうなものに御調印なさいましたか」

「イリオットはちよつと考へて居りましたが、

「あゝ、そんな事がありました。債務を拂ひ了るまで、チャーリー、ホローの地所を擔保として置くといふ約定です」

「さうですか！なるほど、流石は男爵ですな！友人の爲めに自分を犠牲にする精神は見上げたものですな。さうですか、すっかり分りました。すると貴方は男爵には非常な恩義がある譯ですな。うむ、實に偉いお方だ、フェランド男爵は」

「男爵は父の親友でした」

「さうですか！男爵も親友の爲めに盡すことが出来れば、さぞ満足でしたらうさあ、グレアムさん。お疲れでせうから、お寝みになつては如何です。御案内しませう」

ストライブレーは蠟燭に火を點けて、先へ立つてイリオットを二階の寢室へ案内し、それから食堂へ取つてかへして、いそがしげに洋筆筒の中を探つて居りましたが、やがて一束の書類を取出し、テーブルによりかかつて、それを熱心に調

べ始めた。と、少時して「はッはッはッ」と笑つた。

「拔目のない老爵だな、フェランド男爵は！拔目が無い！かういふ事にかけては天才だよ！チャーリー、ホローの地所を押さへてるんだな。債務を辨償したつて、差引き少くとも五萬磅の儲けはある。此大財産が二階の先生の所有なのかなア！しかし肝腎の御本人は御承知ないんだ。恐らく男爵は一生知らさずに置くだらうよ。おい、男爵、貴殿は何といふ凄腕だい！」

翌朝になると、ストライブレーは前日より一層の尊敬と親切とを以てイリオットを待遇し、是非とも自分の家に泊つてくれと勧めるで、イリオットは其好意を無にする譯にも行かず、倫敦滞在中はストライブレー方を宿とすることになつた。

ストライブレーはイリオットが外出する度毎に、女關先まで送つて出て、
「貴方のお體は大事なお體ですからお氣をお付けにならうと可けませんぞ。」